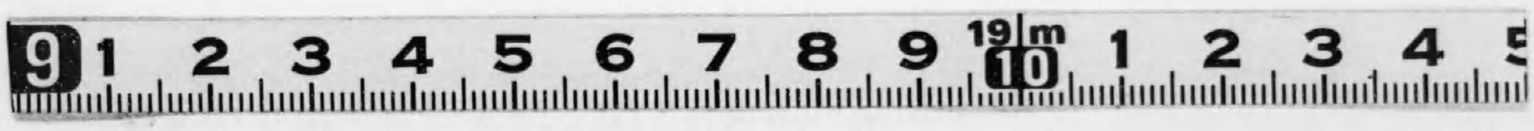
504
186
X 複写



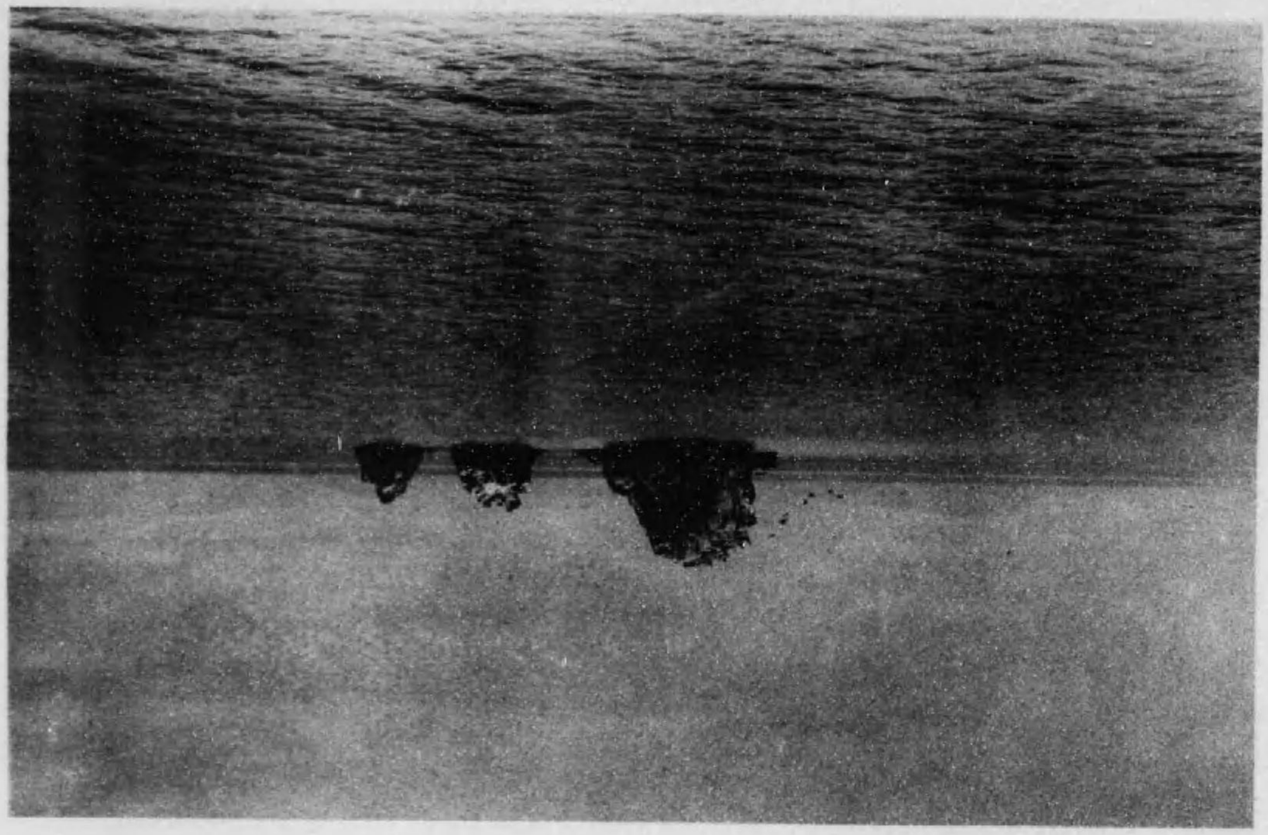
504
186
×
複写

504-186

近江の兄弟ヴォーリズ等

この記錄を恩師
ヴォーリズ先生と
死後の世界に先驅した
近江ミッションの母
吉田柳子へ捧げます。

近江の兄弟ヴオーリズ



獨逸ムーリトッチ住宅

序

豐彦さんが跋まで書いて下さるし、多くの兄弟達が、すゝめて下さるので、とう〳〵、私の拙い筆になつた、此本が御手許に存在する事になりました。私の心は此物語りの主人公に對する、感謝と感激で一ぱいになつて居ります。記述された事實は、波瀾もあり、涙もあり、山もあります。皆天の父なる神様の愛の顯れに外はありません。

此物語りを可能ならしめた兄弟達、特に、村田幸一郎兄、武田猪平兄、佐藤久勝兄、ウォーターハウス兄に深き感謝を表します、裝幀は佐藤兄を煩しました。

一九二三・四・六・

近江八幡町にて

吉田悅藏

はしがき

歴史を書くのは大仕事であり、又困難なる事業である、正確を要求すれば、今日の事を今日書く新聞の記事にも許されない誤謬がある、十年十五年前の事件を詳しく、且つ正確に書綴るのは至難である、そして文藝的と迄は行かぬとも、讀み易く趣味と興味をそゝりつゝ、神のなし給へる奇跡を記す事は更に難かしい。

然し、書かねばならぬ時は熟しつゝある、或る雜誌に無我苑物語と題して、未知なれども精神界の同志、伊藤證信氏の回顧錄と將來の抱負が掲載されてあつたのを見て、私の心は『時來れり我も書くべし』と叫んだ、無我苑には當代の社會學者、京都大學の河上肇氏も飛込んで行つた事が出て居る、無我苑が、

東京巣鴨の大日堂に始まつて、新らしき村の運動の如く、大理想、大抱負を懷いて第一分苑より第三分苑迄擴張して行つた目醒しき發展も『同志が互に不平を持たり持たれたりせねばならぬは何事であらう』との問題の爲め、伊藤氏の心内革命で、無我主義の實行に入つて一年半、團體の形を取つて九ヶ月にして斷然閉鎖を宣言された顛末が記してあつた、私は此文章を認めて見たいと思ふのは、如何に神の遣し給へる一人が、理想主義に立ち、土に埋れし芥種の如きものより、基督教傳道團と、建築設計事務所と、肺結核療養所と、琵琶湖上の福音船ガリラヤ丸と、教會等とに成長して來たかを物語りたい爲めである。

事實に就ての誤りもあらう、人について書き過る事も豫感せられる、後日より見た批評の如きもあらう、然し私は、大なる錯誤なしに書き上る積りと、其の責任を感じて居る。幸に、數年前出版されたヴォーリス氏の「日本に於る

芥種」(英文)あり、舊い日記あり、機關雜誌湖畔の聲と、英文月刊の『マスタート・シード』がある、私は參考書と參考人の便をも有して居る。

さらば、ペンの走る音と親みつゝ、燈火の下、又は太陽の光を受けた製圖室の一隅にて、過去十數年と、永遠の昔より今に働き給ふ天の父を思ひながら此勞働に入るのである。

(大正九年二月)

目次

一　琵琶湖畔へ……一
二　暗い住居……四
三　英語教師……一一
四　世界の中心……一七
五　バイブル・クラス……二五
六　狙ひ撃ち……三〇
七　日本印象記……三五
八　消息……四五
九　心の清き者……四六
一〇　バプテスマ……五二
一一　耶蘇と非耶蘇……五九
一二　爆發……六四
一三　捏造記事……七四

挿繪目次

一　近江の兄弟ヴォーリズ……頁
二　琵琶湖……五
三　近江サナトリアム本館……五
四　暗い家とヴォーリズ建築事務所……九
五　家賃參圓の暮しと片目のコックさん……一五
六　三日間迷つてから到着したヴォーリズさんのトランク……一五
七　最初のバイブル・クラス……一五
八　耶蘇派の一團……六五
九　落成するとすぐ不評判になつた八幡町キリスト教青年會館
　　八幡組合キリスト教會……一一一
一〇　近江ミッションの母吉田柳子……一五五

一四　宗教熱……八六
一五　往復切符……九四
一六　太平洋を距てゝ……一〇一
一七　旗擧げ……一〇六
一八　米と鐵……一一〇
一九　斷頭臺……一一九
二〇　酒呑み……一二七
二一　日本の涙とアメリカの涙……一三五
二二　母……一四四
二三　外國へ……一五四
二四　大手術……一六六
二五　日本刀とメス……一七五
二六　近江八景……一八九
二七　近江ミッション……一八九

* * * * *

跋　賀川豐彦

一二　私共の基礎なる兄弟M　……一六七
一三　アメリカでのI　……一六七
一三　ヴォーリズさんの父母　……一八一
一四　ガリラヤ丸　……一八一
一五　近江基督教慈善教化財團近江セールズ株式會社事務所。米原シオン會館　……一八七
一六　近江サナトリアム五室分館　……一八九
一七　ヴォーリズさんのお家とIの住家などある財團の家のグループ　……一八九
一八　私共の爲に若くして白頭となつたヴォーリズさんと其夫人　……一九五

近江の兄弟ヴォーリズ等

吉田悅藏

一

日露戰爭の眞最中、旅順口が落城して血生臭いお正月を迎へた、あの年の二月、思出せば明治三十八年である。その二月の二日は、北風の吹く厭な日であつた、午後の四時過には既に太陽が比良山の彼方に、雲がくれして居て、薄どんよりした空に、安土の城趾と、湖上に突出た奥島半島の隙間より一陣も二陣も、イヤ間斷なしの寒風は、野中に淋しく立つて居る、上り下りのプラットを連絡する陸橋もない、小ぽけな八幡ステーションに吹つけて居た、其時列車到着、僅か計りの旅客の乘り降りの混雜中に、立襟した濃紺色格子縞の着古び

た外套、山高帽、肩より斜にかけた寫眞器も古さうな姿に、白色人種特有の美しい齒を出して淋しく微笑しながら立つて居る、年の頃は十八とも二十とも判斷の出來ぬ若さを持つたアメリカ人があつた。それがヴオーリズさんである。

ボリスと言ふ人もある、ヴオリスと言ふ人もあるが、本人は當にヴオーリズですから間違はないで下さい、特に語尾はスでなくズですと訂正する程小さい處迄氣を配る青年で、名前から言へば、和蘭陀訛りの匂がする樣に、元は和蘭陀種で英國とフランスの血が混淆したアメリカ人である、國の中央カンザスに生れ、熱帶と砂漠で有名なアリゾナに育ち、後、中學時代より大學生活を終る迄、海拔一哩の高原、ロッキー山脈の東麓、コロラドに暮して來たヤンキーなのである。

『私はとう〳〵日の出る國へ來た、湖畔の商業學校と中學校に敎鞭を取るのだ、日本語はまだ三日前橫濱に上陸をした計りだから、オハヨー、サヨナラ、だけしか知らない、來て見ればコンナ田舍、寒い淋しい孤獨だ、近江の國は人口八十萬と聞いて來たが、アメリカ人は私の外に一人も居ない、英語を話す人もありさうでない、日本は日の出る國ではない。日の入る國の樣だ。イッソ次の列車で橫濱に行つて、船に乘つて歸つて了つた方がよい』と回顧錄に書いてある程ヴオーリズさんは八幡驛のブラットで感じた。

それは東海道近江八幡驛に、夜中又は朝早く下車した日本人の誰もが實感する事である、八幡町は其姿も見せないで森の陰にあるし、ステーションから町迄、兩側田圃の一筋道を半里以上行かねば町の入口につけないのだもの。

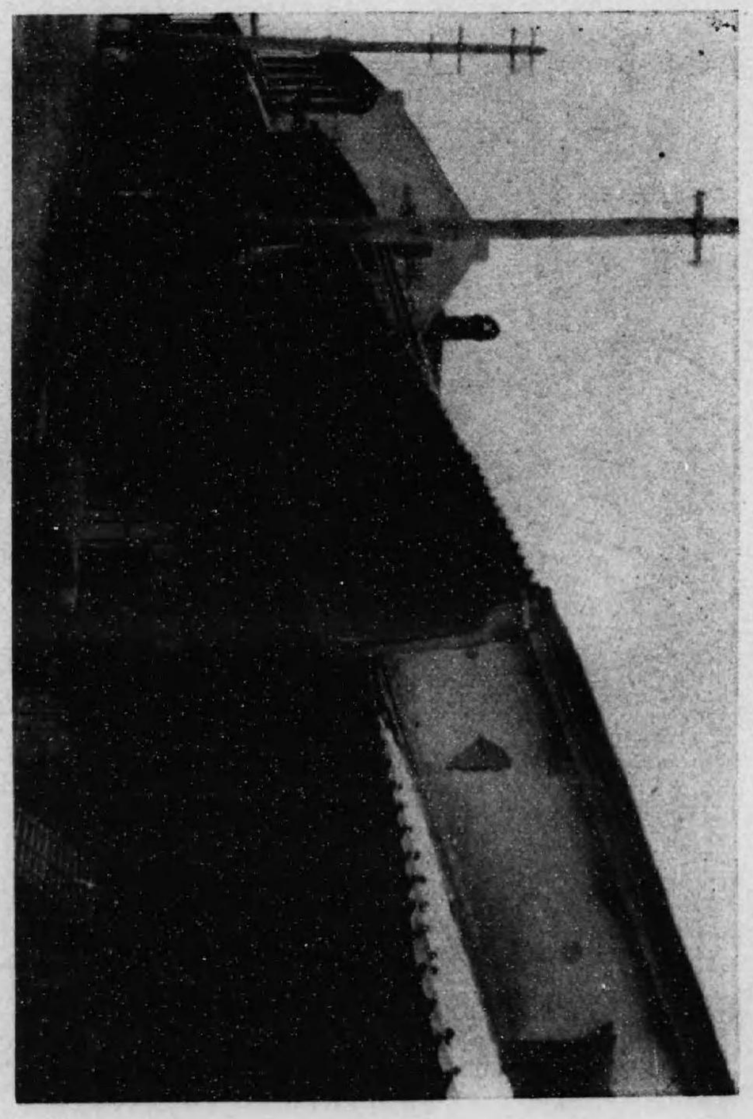
A先生が學校からお迎に來られた、先生は薩摩人で、發音に薩摩土音の混る人であつた、ヴオーリズさんはA先生の案內で始めて八幡町の土を踏んだ、そ

露光量違いの為重複撮影

して前任のワードと言ふ四十男の借りて居た家賃三圓の、ダダッ廣い家に、片目のコックさんと共に住込む事になつた。

二

近江八幡の町は近江商人の町である、舊家と言ふのが二百年以前から主人顔をして居て、番頭達が長年勤めた報酬で暖簾分けをして貰ふた別家が、町の全體に散在して居る、舊式で保守で、カール・マルクスが喜んで引用する實例の多くにありさうな、金――商品――金、の町だ。湖畔の町かと思うて來て見ると湖水は山に上らなければ見えない、一里も遠方にある、湖水と町とを絶縁する



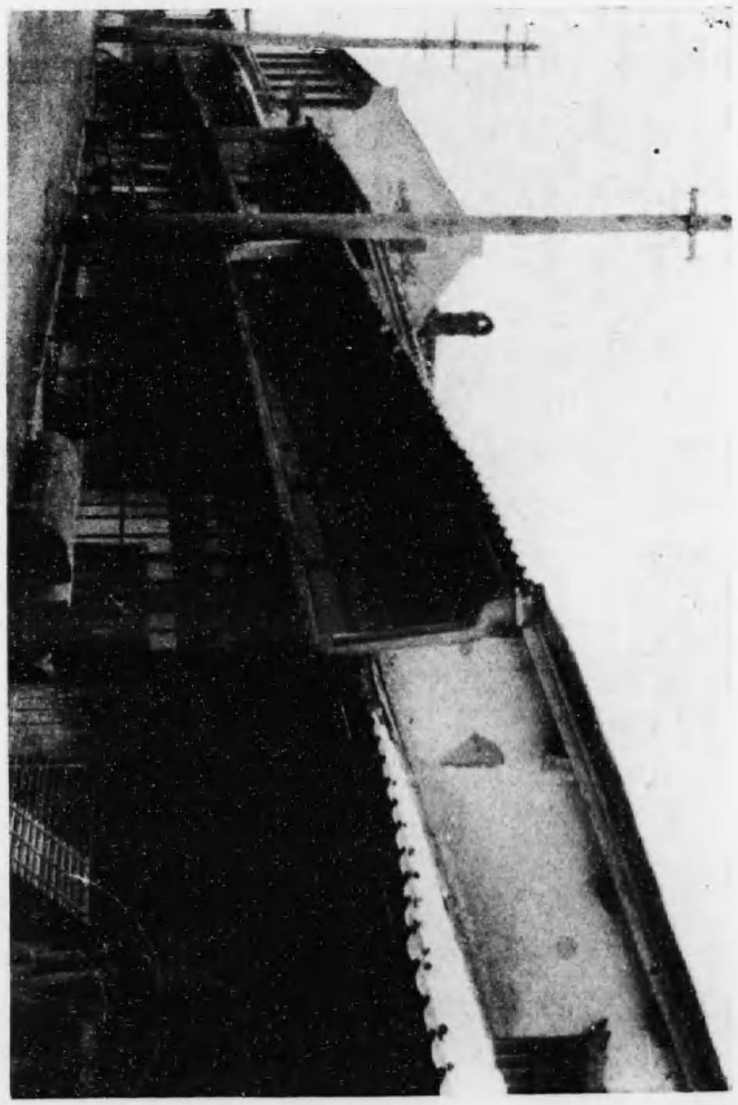
（館洋）所務事築建ズリーナヴェ紫い暗

露光量違いの為重複撮影

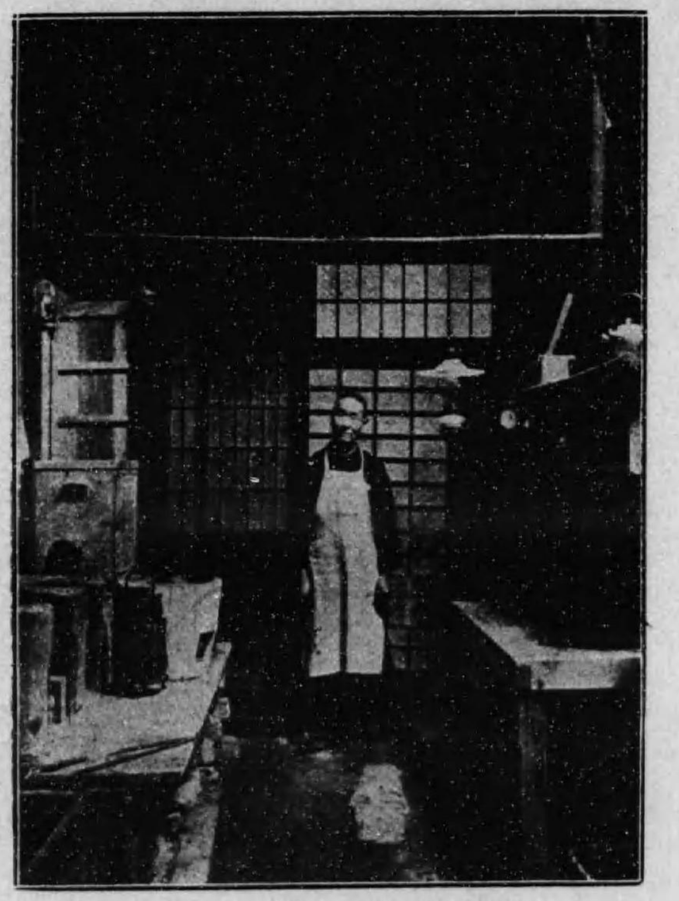
して前任のワードと言ふ四十男の借りて居た家賃三圓の、ダダッ廣い家に、片目のコックさんと共に住込む事になつた。

二

近江八幡の町は近江商人の町である、舊家と言ふのが二百年以前から主人顔をして居て、番頭達が長年勤めた報酬で暖簾分けをして貰ふた別家が、町の全體に散在して居る、舊式で保守で、カール・マルクスが喜んで引用する實例の多くにありさうな、金――商品――金、の町だ。湖畔の町かと思うて來て見ると湖水は山に上らなければ見えない、一里も遠方にある、湖水と町とを絶縁する



（横浜）所務事築建ズリーオヴミ家い暗



家賃月參圓の暮しと片目のコツクさん

山が、その昔高野山に逃込んだ近江宰相豊臣秀次を困らし抜いた山だ、秀次は井戸を掘つたが、掘つても掘つても水が出ないので碧水を湛へて居る湖水を見ながら『往生』したと言傳へられて居る鶴翼山である、五里も向ふの山から見なければ鶴らしい姿はして居ないから町の人は八幡山と言ふ、そして歌人の外は美文めいた名を呼ぶものがない。

本願寺派の別院が二つ、黄壁に白線を入れて町の西南に堀深く、塀高く割據して居る、山に登ると寺の棟が十八も目の下に見ゆる位、佛教熱心な町である。

何んでも信長の安土城下の人々が落城の時に移住した町であると傳へられ、又近江源氏佐々木氏滅亡後其家臣達が士魂商才で、日本六十餘州に近江屋と名乗つて近江泥棒と言はれる程に金儲けをして廻つた、其根據地であるさうだ。

町は小京都とでも言ふことの出來る、碁盤面の縦横十字街で、雨が降つても

泥のつかぬ蒲鉾道があつて、日の照つた時よりも雨の降つたときによい感じを與へて與れる町である、即ち下水が雨の日は美しくなつて道を行く時都大路よりも氣持がよい。

ヴォーリズさんと片目のコックさんは魚屋町の下通り東向きの暗い大きい家に住んだ。

採光の惡い六疊四室、十二疊一室の家で、中二階は鼠の住家で開けずの間になつて居た、庭には二抱へもある松の大木が三四本石山の上にあり、後に土藏二棟、前の空井戸は茶人めいて粗石の四つ井げたになつて居る。其の前に竹の縁、續いて入口二尺幅の便所がある、飛石があつて夜は氣持のよくない庭だ、家主さんは喜六さんと言ふ盆栽好きの温順な方だ、お隣に住ん居られて時々アメリカの人はストーブの煙突穴を無闇に空けて屋根に雨漏りを作つて與れるか

ら困りますと、其腰の低い善良な姿を顯して與れる。

座敷十二疊の天井や柱と欄間はキヅだらけである、何でも喜六さんの先代が維新の時の勤王家凝りで、井伊掃部に狙はれて京都より落ち延びた志士を匿つた事があつて、それと知つた彦根藩士が大擧して此暗い家を取り圍んだ、そして拔身の槍と白刃を持つて斬捨御免の捕縛に向つたものださうだ、喜六さんの先代は志士を裏口から彦根の膝下多賀神社に落してやつて、同志の神主が神體の御厨子の中に其人を隱し通したさうだ。

そんな騷ぎがあつて四十幾年もしてからヴォーリズさんは、槍や刀に斬り突かれた座敷十二疊を書齋兼食堂、兼寢室、兼應接室、兼柔道の稽古場及藥局にしたのだ、前住の英語教師ウォード君から古い木框に鷄の圍ひにでもしてよい赤鰯の樣に錆た、金網がスプリングの更りになつて居る、まん中の無闇にヅ

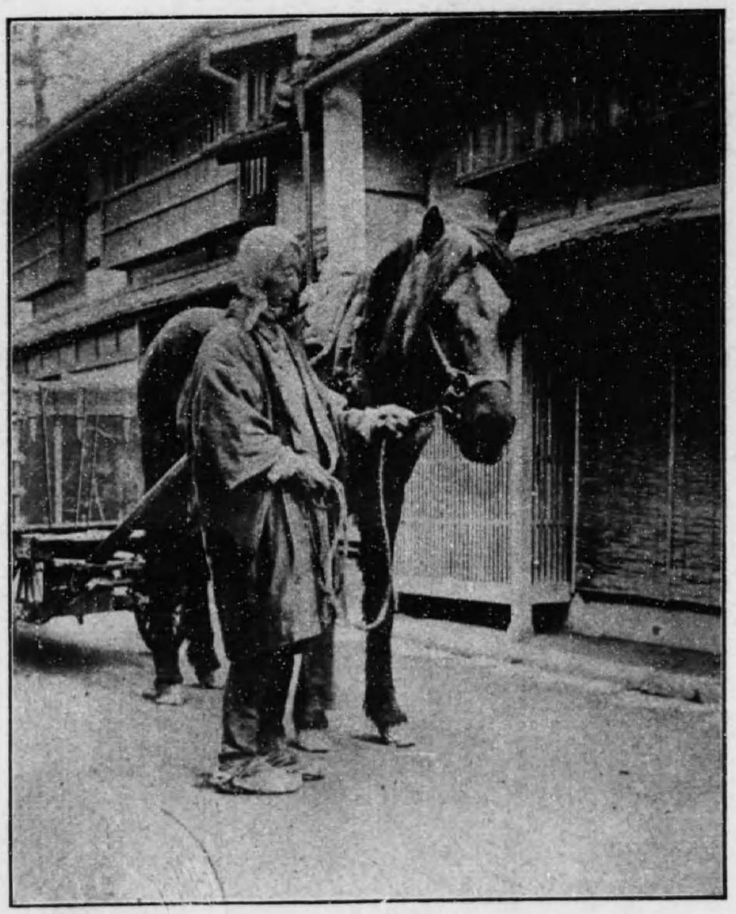
り下るベットと、二寸も厚い四角の板に四本足をつけたテーブル、グラ〳〵椅子、泥まみれの緞通、ガラス製の安物ランプと薄汚れたストーブを譲り受けた。

暗い家に獨りで坐り込んだヴオーリズさんは淋しかつた、堪らなかつたと追懐談を時々することがある。

『私は、金があつたらすぐ歸る處でした、世間の手前も何も構ふことはない、失敗して遁げ返つたと言はれても甘んじて受けやう、極東の日本の片田舎に獨りで暮すのはたまらない。ホーム・シックネスだ、然し有難いことには其とき金がなかつた、私は借金迄して旅費を拵へて出て來たのだから』と。

手荷物を入れたトランクは鐵道院の手違から、八幡到着後三日も何處かに行つて行方が知れなかつた事もヴオーリズさんの打擊であつた。

『私は小さい手カバン二つで、初めの三日を暮しました、せめて荷ほどきで



三日間迷つてから到着したヴオーリズさんのトランク

もして氣を晴らしたいと思うても荷物はなし、學校の方は親切に三日の後より出勤して下さいと言うて呉れるから出かける譯はなし、する事なく話す友もなく、淋しさに追はれて、聖書を手にし、祈禱をしたのです、そして、私の一生に曾て經驗した事のない神との交りを結びました』

露西亞のクロポトキン公爵はペトロパウルスクの要塞監獄の獨房に幽閉された時つく〳〵感じた事を次の樣に手記して居る。

『墓場の樣に寂寞たる獄中の空氣には遂に堪えられなくなつた、苦しさの餘り私は壁を叩いたり足で床を突ついたりして他の獄房から應ふる微な音を聞かうとしたが四邊は寂として更に應へが無かつた、呼吸の音一つだつて洩れ聞えなかつた、一ヶ月過ぎ二ヶ月過ぎた……

敎育のある人でさへ一人無爲に幽閉されて居ることが苦しいならば、四肢の

勞働にばかり慣れて、讀み書きも知らぬ農夫にとつては無限の苦痛である、だから私の下の獨房の農夫は悲慘極まる狀態に陷つた……。

彼は最早心身共に滅茶苦茶に亂れて居た、私は彼の精神が暫くの平安も無く動搖して居ることを知つて驚いた、彼の頭は益狂亂して刻一刻日一日と其理性が無くなり、遂に怖ろしい聲と野獸の樣な叫びが、下の室から聞えて來た、……人の精神が打壞されるのを見るのは戰慄すべき事であつた……。』

精神的の修養のないものが絶對孤獨になると、小人閑居して不善をなす以上に其身と心を破壞して了ふ、しかし、ヴォーリズさんは此孤獨の時を神と共に暮してホーム・シックネスを追出し、力の人となつたのです。

三

『今度の毛唐はポリスと言ふ奴やなア』

『ポリスなら巡査と言ふ事やけんど、ポリスは何んや、君』

近江八幡の町の南隅にある粗末な二階建二棟と。平屋の寄宿舍と、講堂と、生徒控室と、運塲塲と、學生三百、教師二十餘人が、滋賀縣立八幡商業學校である。

其柿の澁を塗つた板の香ひする二階の廊下で、腕白連が右の樣な會話をして居つた。

當時二十四歳のヴォーリズさんはY校長K教頭先生達に導かれて二年甲組と書いた木札の掛つた教室に近づいて來た。

二年生の生徒等はドヤ〳〵と教室に入つた。
『氣をつけ』『禮』と級長が吐鳴つた。
ガタ〳〵音を立てゝ席につくと、教壇の上、汚れた黒板を後にして、若いアメリカ人が田舍で見慣れない純白のカラー、派手なネクタイに舶來の背廣でニコニコして立つて居た。
教頭K氏の紹介があつて、愈〳〵ヴオーリズさんは教師になつた。
『ボーイズ、私は君達を指導する事を無上の光榮とする、英語の研究は發音が第一、會話が第二、讀書が第三、文典第四です。私は發音と會話を教へに遠いアメリカから海を渡つて來ました』
と、はつきり、一つ〳〵言葉を區切りながら話したが、三十餘名の學生は二三人を除いて解つた樣な顏をしたものが絶えて無い、白墨を取つて言葉の內にあ

つた單語を、一々黒板に書いた上、生徒の名を出席簿で拾ひながら、吉田をヨシヤイダ、高橋をテケヘシ、塚本をツケマトと一人々々立たせて、黒板の字を讀ませて見たりした。
やがて四十五分もすんだ、そして生徒連は本をとぢて、運動場に飛出す準備をし始めると、突然ヴオーリズさんは白墨をチョークボックスの中に仕舞つて
『アイ、アム、ローンリ。カム、エンド、シー、ミー、アフタ、スクール』
と言うて輕く會釋をして出て行つて了つた。
『アイ、アム、ローンリて何やらう君』
『ローンリは淋しいと言ふこつちや』
『放課後遊びに來いと言ふたぜ』
『行つたろか、ワードやグラントの時、上級生の尻について毛唐の所に行つ

たら、ヤソの本を請ましやがつて、センベを食はせよつたが、今度のは若さうな異人やから、面白いかも知れんぜ』

『教師のくせに淋しいから遊びに來て呉れなんて、……そんな事を毛唐から聞くのは今が始めやな』

『今夜偵察に行くものは集れ』

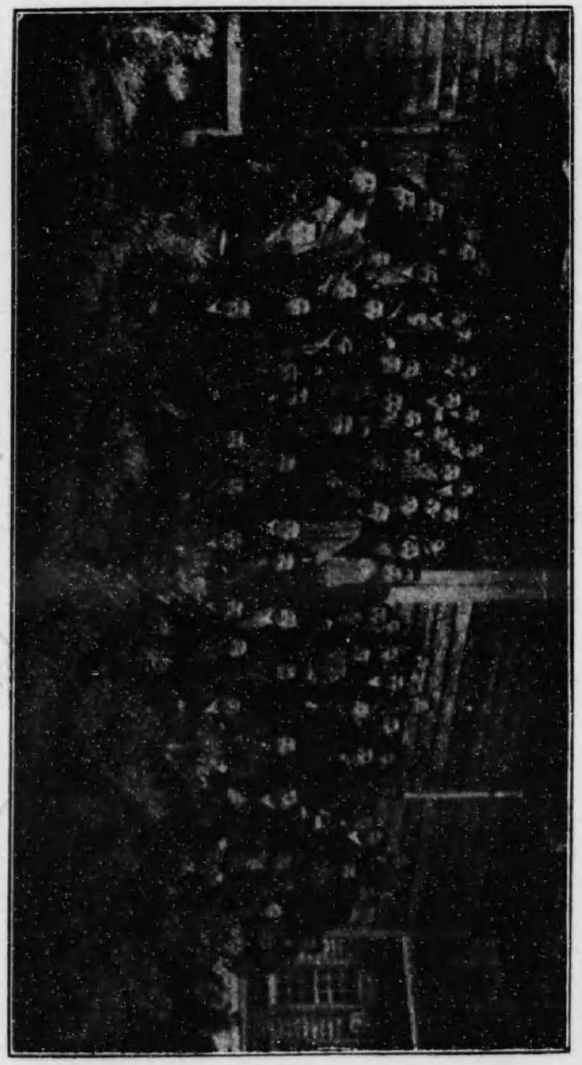
『行つてやれ、行つてやれ』

ワイ〳〵批評して居る生徒の中にこんな話があつた、そして其晩ヴォーリズさんの借りて居る、暗い家に數名の學生が訪問した。

『お前から行け』

『いやお前は英語が十八番やから先に行つて呉れ』

『グッド、イブニングと言ふたらよいやないか』



スラッルブイバの朝晨

？れ誰る居でん潜も者たつなに商紳の本日に内の達生學の此

片目のコックさんに案内されて茶の間から奥の十二畳を覗くと、ランプの薄暗い光の下に一人ボッチで、フォークとナイフを動かして居る影が間仕切の紙障子に影つて居た、誰かゞ思切つて「グッド、イベニング」と下手に大きく吐鳴ると、影は動いて障子がスッと中から開いた

『ハロー、カムイン』と迎へたのは、赤色のスエッターを着けて上衣を脱いだヴォーリズさんで、ニコ〳〵として居た。

食卓の食器が片附られると、其上にアメリカの風景寫眞が積まれた、そして珍らしがる生徒連に一々面白い説明があつた、さあ、アメリカのゲームをやらうと言うので、數字合せになつたカルタ、フリンチ、ドミノ等が持出された。

生徒連は此アメリカの先生が、先生らしく上座から見下す様な事をしないのに全く引付られて了つた。

三百の學生は、其當時よくもあんなにヴォーリズさんに引付られたものである、上級生は勿論豫科の生徒で、ABCしか知らないもの迄、ヴォーリズさんの處に遊びに行く樣になつた。

ヴォーリズさんの胸中には、如何にして湖畔の住民八十萬に、天地に唯一の神あり、唯一人の救主イエス・キリストがある事を傳へる事が出來るであらうかと言ふ大問題が潜んで居たのである。

其當時の事を、ヴォーリズさんの手記によると次の樣なものがある。

『私は歸るに歸られぬ事となり此近江に踏止る事となつたからには、私の敎へて居る生徒達を目當に『神の國の擴張戰爭』をせねばならぬ、第一、私は學生の信賴と、友情を手の内に握つて始めて彼等の内心に忠言を徹底せしむる事が出來るのである、それで私は私の家を放課後の學生クラブに提供した、そして來る者には、出來得る限り歡待する事にした』

四

その頃は明治三十八年の春である、八幡商業學校に名物男があつた、それはボーイと綽名された、助敎諭で背の高くない、身體の割合に首から上が重さうに大きく見え、歩行の時にユラ〳〵と前後に、其頭が振れるので學生の注意を、一身に集中したM君である。

紀州和歌山の人で、大阪の書籍店の小僧をして居たが、近江商人の風を慕つて八幡迄勉學に來たのださうだ、比較的年のふけて居たのと、堅實な努力主義

の人であるので同級生の尊敬を受けて居た、優等で卒業すると、直に校長Y氏の勸誘で母校に居坐り、英語科の助教諭となつたのだ。

M君の机の上には、バイブル、内村鑑三著求安錄、同基督信徒のなぐさめ、木下尙江著火の柱、平民新聞、聖書の研究、新人等の書物や雜誌が常に載つて居た。

M君は前英語教師アボット時代からキリスト教に歸依して、土地の組合キリスト教會の信者になつて居たのだ。

ヴオーリズさんは、學生達の倶樂部として、其一ケ月家賃三圓の暗い家を提供して、腕白連を歡迎し、「おとなし屋」連に英語の科外教授をして居る中にM君を發見した。

『ユーカム、エンド、リヴ、ウイズ、ミ』

『ウム……』

M君の頭の中で日本語で文句を考へた、英文典、上、中、下編の公式を定規として、和文英譯しかも美文？を作つて後口外に發表する人であつた。

『なる程、ヴオーリズ君は俺と同居したいんだな、どう返事をしようかしら「川止めに渡し舟」は一寸英語にならんし、「待つてました」は露骨過ぎるし、無難間違ひなしは「サンキユー」だなあ』と考へたかどうかは保證の限りでないが『サンキユー、ありがたう』と彼は直に一決に及んだ。

M君は、其頃寢ても醒めても太平洋の浪の音、星とダンダラ染の三色旗の國を夢みて居た、其友人は既にヨルダンの彼方——乳と蜜のしたゝる北米の天地に青雲の志を遂行しつゝあるのだもの。

M君は實力〳〵と、己れによく言ひ聞かせて努力した人だ、そして人なき森

に、寄宿舎の舍監室に、學校の當直室に、熱い涙を湛へながら祈つたさうだ。

『天地の神、我等の父様、湖畔の天地は暗黑です、學生は性慾の奴隷です、酒と汚れと金の爲めに、サタンのものとなりつゝあります、外國からでもよろしいから、精神界の巨人を此八幡に遣はして下さい』と。

M君の手荷物や夜具類全部は、たゞ一回の手車で、ヴオーリズさんの家に運ばれて了つた、宿替は簡單であつた。

ヴオーリズさんの當時の筆記を今になつて出して見ると、

『私の八幡町に落付く様になつたのはM君の祈りと神の計畫から、さうなつたのです、最早日本—近江—八幡町は世界の中心です』

記者は往年、英京ロンドンの中心トラフアルガー、スクエアーのグランド、ホテルの一室に、一英國紳士と話した事がある、其時、其人の話はかうであつ

た。

『君の友人のヴオーリズ君は、先年ロンドンに來て、私の敎會で演說を賴んだ時に「世界の中心は近江八幡マチにある」と言うて居たよ、私達はそれだから、世界の中心は、隨分探すのに骨が折れる筈だと言うて笑うたのさ』

地球が完全球であれば、どの點でもある中心になることが出來る道理である、學者が地球は球形ではない、蜜柑形であつて、兩極が引凹んで居ると言うても大體は球で通用する、紺碧の大空に輝く大熊星座の作る大柄杓の先は、北極星を指すと極つたものである、綿密に計算して、眞直線に指して居ないと揚足を取るのも變なものだし、閑もかゝる譯である。

ヴオーリズさんは、よく諧謔を談話に交へる人である、其語呂合せ、日米混交は天下一品である、『飲み水は蚤水です、日本の西洋料理屋では、サイダーを

賣る爲めに少し計り、蚤の飲み水程しか持つて來て呉れないです、蚤は英語でFleaだが、日本ではFreeと發音するから日本では飲み水を、たゞで呉れさうなものですね』と言つた樣な事に笑ひ興じる事がある、が然し、此世界中心說は丹波綾部の世界中心說より、慥に確實で宗敎的で眞面目である。

ヴォーリズさんは、明治三十八年から、今に至る十數年近江八幡を動かない、そして今後死に至る迄永住する、そして自身の墓地も既に選定して、美しい湖岸で昔の代官屋敷を二反歩程買ひ込んである始末。

何故近江八幡がヴォーリズさんの世界の中心であるかは、此物語りが回を重ねて說明する處であらねばならぬ。

兎に角M君とヴォーリズさんは同居することとなつた。

五

『M先生と、ヴォーリズさんが同居をしたそうやなあ、君』

『うん、昨夜、僕がなあ、ボリさん所へ行つたら、僕と君とに宿替して、うちへ來いと言うてたぜ、どうしよう』

商業學校の二階廊下でKと呼ばれるデブ青年で、機械體操の金棒にぶら下ると、金棒が彎曲するので有名な體量十九貫の本科二年生と、Iと呼ばるゝ棹竹の樣にヒョロ長い、子供々々した同級生が話して居た。

『春休みが來たら。それぢや、宿替して異人さんと同居しようか』

『うん、然し、ボリさんて、妙な人やぜ、入る部屋もないのに同宿すると言うのやからなあー、それ、入口の上の六疊は片目のコックが居るやらう、其

次の間は玄關の隣りで、靴のまゝ〳〵りさんがどし〳〵上つて來るし、奥は主人公の占有する所、其隣はM先生と來る、僕等は差詰め何處に置いて呉れる積りかしらんて』

『そいつは聞かなかつた、然し來ひと言ふからには塲所があるに違ひはあるまいぞ』

明治三十八年の三月が來た、學年試驗もすんで、ホッと重荷を下した樣に感じたKとIは或る日、ヴォーリズさんの暗い借家に出かけて行つた。

『カム、イン』とニコ〳〵のヴォーリズさんが、ムッとする程暖かくした部屋から出て來て、兩人を手に取る計りにして、自分の部屋に案内した。

英語でヴォーリズさんは、新しい部屋が出來た旨を話して呉れたが、其要領は次の通りであつた。

『日本人が家を建てると、屋根裏の利用と、煙突を作る事を考へないらしいです、此の私の借家には屋根裏が大きく明いて居ますから、街道の方に硝子窓を二つ大工につけさせました、君達兩人は表の屋根裏に住むことにして下さい、私は明日君達と一しよに屋根裏の、煤けた梁や柱に新聞紙を張つてあげる、壁は白い洋紙一枚二錢のを二重張りにすると、白壁の代用になるから、早速、明日は部屋の準備に二人で朝早くから來て下さい』

KとIとは度膽を取られて了つた、何しろ、異人さんは、建築の趣味があると言ふので、無闇に屋根裏へ靴の儘ガサ〳〵上つて行つて、柴やら炭俵の舊いものを積み上げてある湖畔地方の、ッシと呼んで居る物置に我等を親切にも入れて呉れる考へであるらしい、的切り、鼠と合住居をやらされるのだ、デブにヒョロの二人が、縱にも横にも屋根裏と柱とに衝突する事なんかお構ひなしらしい。

『おい、K君、どうしよう、僕は生れてから、あんな屋根裏に上つた事もない、鼠の糞が一斗位あるぜ』

『I君、僕等は辛抱して今の内に異人さん所の書生になつて、英語をうんとたたき込んどくと、將來の力になるからな、辛抱して宿替して來ることにしようや』

其翌日、KとIがヴォーリズさんの借家に來ると、大きい西洋皿に姫糊が一ぱい、大はけ二つに、古新聞紙と洋紙の、材料が整つて居た、KとIは屋根裏に上つた、煤と、塵と、鼠の糞の異臭の中に、ヴォーリズさんは總指揮官で三人は表具やとも掃除屋とも知れぬ仕事に一日を暮して部屋を作つた、そして疊屋が來て、床には新しい上敷を敷いて呉れた。

それからKとIの二人は屋根裏ではあつたが、ヴォーリズさんと同居する事

になつた。

暫くしてM先生の部屋に割込んで來た他のKと、コックさんを頼んで同居を許して貰ふたYがあつた、そしてヴォーリズさんは、學生四人とM先生とを同居させた譯である。

其頃、學生は絶えずヴォーリズさんを訪問した、ヴォーリズさんはバイブルクラスをしてやらうと其學生連に話したから。好奇心に騙られてクラスに來ますと約束すると、ヴォーリズさんが戸棚の中から立派な一冊五十錢もする、五號活字略註附新約全書を幾冊でも出して來て、惜し氣もなく學生に呉れてやる計りか、表紙を開げて、一々美しい英文で、

『この律法の書を汝の口より離すべからず、夜も晝もこれを念ひて其中に錄したる所をことゝく守りて行へ、然らば汝の途福利を得、汝かならず

勝利を得べし』

と書いてウキリアム・メレル・ヴオーリズと、日本字で言へば、上手な題目、南無妙法蓮華經のハネ上げた字風を横にした樣な、シグネチューア（自署名）をして一人一人に、ロハで呉れた、それで大勢の學生は大喜びで聖書研究會に來ることになつた。

人生意氣に感ずると言ふ事がある、若いアメリカの青年ヴオーリズさんが太平洋を渡るにも借金をして旅費を作つて來て居りながら、八幡に到着するなり、第一ヶ月目の月給から惜氣もなく大金五十幾圓も割愛して、聖書を百幾十冊も買込んで、戸棚に入れて置いて、學生にロハで呉れてやつた程、綺麗サッパリした氣前には、隱れたるもの顯はれざるなしで、引附けられ、吸附けられ、遂には學生達の愛慕の的に迄變じて行つた、實にヴオーリズさんは、金離れの

よい切れ手であつた、

聖書研究會の最初の夕は四十五名であつたが、度重なるに從つて、其來會者の數を增し、一週二晩二組として、出席者二百十二名となつた、（此數は精確であり拾ひ出しました、記者）商業學生の全數は三百餘であるから約三分の一强は喜んで出席して居る有樣になつたのである、そして愈〻宗教運動がヴオーリズさんを中心として捲き起ることゝなつた。

六

『イエス樣、信じます、眼を開けて下さい、一生の願で御座います』

松の緑も、紅の花も、兩親の姿も知らぬ盲人はキリストの裾を握つて離さない。

イエス様の唇よりは、かすかな祈りの息が洩れた、盲人は粛然として座した、イエス様の御手は盲人の目に觸れた。

『アッ、何だかぼんやり見えます、大勢の人間は、聞いて居ました林の木の様です』

イエス様の第二の御手が再び目に觸れた。

『ア、ア、アッ、見えます、見えます、一人一人、人間は違つた顔と違つた姿をして居ます、オヽ嬉しい、驚きました、不思議な事で御座います。』

新約聖書は古來無二の繪卷物である、土佐派の繪の様に彩色の派手な、美しい、嬉しい場面が澤山にある、キリストは群集の王でなくして、個人々々の兄

であり、教師であり、又完全な父でありました、私共は十把一束に取扱はれたくない、一人々々の人格を認めて欲しい。

ヴォーリズさんは、バイブル・クラスを組織したが、其一人、一人を忘れなかつた、ヴォーリズさんの教へ方は、群集に向つて大氣焔の大砲を放つ計りでなく、短刀を取つて、個人の肺腑と心臓に肉薄する即ち狙ひ撃ちをするだけの努力と信仰があつた。

ナポレオンは帝位に即いてから叫んださうだ。

『我は泥土より將軍を作るものだ』と。

ヴォーリズさんは、ソンナ事は決して宣言しなかつた、然し己の至誠の涙を以て泥土を煉つた、静かに、失望せずに、二十五年の將來を見て、ヤンチヤ盛りの學生の陶冶に没頭したのであつた。

『ヤア、水曜日が來よつた、またボリ公の所へ遊びに行かうか』
『又煎餅と、お祈りが出るぜ』
『近頃、菓子屋に行くと、バイブル・クラスと言ふ煎餅を賣つとるぜ』
『行かう、行かう、クラスの前に今晩はヴォーリズさんに、柔道の極意を敎へてやらう』
『オイ、此前の時な、大橋とボリさん、角力を取つたらボリさんの金縁眼鏡に大橋が手をかけたんで、メチャ〳〵に壞れたぜ』
『毛唐さん氣が大きいから知らん顏で騷いでたよ』
『ボリさんと、取つ組むと、下顎のゴリ〳〵髯で、俺の頬べたを、ゴシ〳〵とやらかして、俺は痛かつたから、參つた參つたと言ふたら、マッタ〳〵と聞き間違へて、待たん〳〵と言ひながらまたゴリ〳〵やられたよ』

『今晩は、M先生が通譯に來ない先に、ボリ公を胴上げにしてやらう』
何しろ、バイブル・クラスは豪い人氣であつた。
『イエスの比喩』と言ふ本と『ヨハネ傳』が敎科書で、A先生と、M先生が通譯であつた。
其頃の商業學校の學生は中學の學生と柄が違つて居た、烟草も酒も一通りヤル方が卒業してからの役に立つ、大きい商賣は宴會の席、藝者の隣りでするものだ等と　途方もない思想が全校を風靡して居た、禁酒禁煙の校則も殆ど顧る人がなかつたと言うてもよい、敎師の前さへ遠慮をすれば、何でも仕放題、又或る敎師は表向きの行爲と見逃さるべき要領のよい行爲とを別々に取扱つてくれたし、修身の點數、操行の點數が合致しないでも平氣であつた、制服制帽は殆ど陰が薄くして、前掛に舊式の烟草入が學生間に偉大なる、成人の表象と

なつて居た。

本科四年の科程を十年計畫で、卒業すればよいと豪語して居る、金持の馬鹿息子もある、其時分官員樣しか着ない樣な、インバネスを着込んで鼻下に美髯を貯へた生徒も居た、それが普通商業の二年生だからやり切れない、藝者遊びもする者あり、其他有らゆる青年期の罪惡を犯して居る樣は今から見てもゾッとする。

ヴォーリズさんは其故國で、青年期の生理及び心理を研究して、世界に名譽を得たスタンリー・ホール博士の著書で有名な、『青年期』と言ふ書物の愛讀者であつた。机の上には始終此本が置いてあつた。

これが種本となつて、獨特な人を捕へて離さない友愛の持主、二十四歳のヴォーリズさんは、腕白にして、生氣意な、自墮落にして、不健康な青年共を一人一人狙ひ撃ちに、性格に應じて陶冶する智慧を得て居つた、然し、何と言うても、信仰第一で、ヴォーリズさんの學生を愛するの熱愛が溢れて個人個人の靈に注ぎ込んで行つたのである。

七

この處あたりでヴォーリズさんの目に初めて映じた日本を紹介したい。

以下は同氏の古い日記の中から譯出したものである。

西暦一千九百五年一月二十九日。

（一）富士ヤマ。

チャイナ號の甲板より眺む、美の極にして、其姿は特異である、薔薇色の空

を背にして立つ、其光輝ある日没よ。！。

(二) 人力車。

上陸は夜となつた、細長い紙製の燈火、人のよさ相な微笑と叩頭、こわれた英語で、ゼントルマン、ブリーズ、ハイヤ、ミ、(紳士、私を雇うて下さい) 其叮嚀さと、優美なる事よ、私は彼等全部を雇うてやりたいね、生れて初めて車上の人となる、強さうな小さい大人の素早い足取りと、ヒョコヒョコと上下する其頭よ。

(三) 狹い曲つた道に、人と車の充滿だ。

(四) 下駄。

木製の履物で變化の甚しいもの、木の質、厚さ、高さ、格好と其型の大小の、數の多さ！

道行く時の音は其特異の格好其他によりて異りたる音を奏でる、私は始め下駄の音を聞いた時、成る程、暗い街路だから、お互に衝突しない爲めに日本人は、銘々首に板を二枚かけて、ガタ〳〵カチ〳〵させて居るものと思うた、停車場のセメントプラットフオームの上は私の頭に響く純粹な音樂を奏でて居る、泥の中を行くのには、高いスタイルの下駄がある。！

(五) 寒氣に無頓着。

古代希臘の如き雪の中の素足！。暖爐なんか無い、火鉢だ、夏の避暑的別莊を年中使用して居る、區間列車の如きは火の氣もない。(青年達の體温と、心臓の皷動を實驗すると、特に兩方共高度である。)

(六) サンパン、(日本の小船)

櫓は魚の尾の樣だ、細長い帆がある、大きい船が小さい人で漕いで行かれる、

一月三十一日チャイナ號に荷物を取りに行つた、そしてサンパンに乘る。

（七）神社と寺院。

松の林の總てに鳥居がある樣だ。中には社がある、狐には赤色の鳥居だ、（狐は何でも古代英雄の家來ださうだ）

（八）竹。

竹林には、棒になる竹の幹、竹の皮は包紙の代用だ、床に竹張りがある、家具にも竹だ、そして食物にもなるのは竹の子だ、これは私が驚いた。

（九）運河。

澤山ある琵琶湖畔の運河は灌水と船便の爲めだ、土地は僅に數尺の上にある、ある土地は水面より低い（田を云ふ、譯者）

和蘭陀の土地を想ふ、そして日本は和蘭陀の感化を早く受けて居るさうだ、

伊吹山の藥草の如き、オランダ人の指導によつたのではないか。

長崎には和蘭陀橋があると言ふことだ、古物商に行くと多くの和蘭陀陶器類が發見される。

（十）農業。

總ての空地は農園だ、野菜の植付が整列して居る間々に、角を綺麗に鋤で切つた水ヱキの溝がある、ウアツフルか、鐵板の上で燒いた六方燒の樣な土が揃つて居る。

肥料は人造糞だ、水にとかしてかける、狹い町に鼻を塞ぐ敵は是れだ、よく煮るか洗はねば、野菜は危險である、女も男と同樣田畑に働いて、一本の棒を肩に收穫物を擔うて居る。

（十一）女。

(A) 勞働する女。

總て醜い、總て悲しい、落膽した顏だ、骨格は頑丈である、百姓女はメンツを着けて居る、京都に行くと頭の上に驚くべき量の材木の束を載せて居る、彼等は何でも頭に乘せる、そして手に持つのはウルサイと言ふのか、空になつたお盆を頭に鎭座させて居た、(そして是等の女から特に九重の宮中に乳母を出し、看護婦を出すこと多年の吉例となつて居る)

(B) 商業する女。

町を歩いても、店に買物に行つても働く女が、布片か蒲團に赤ん坊を卷いて、母と子が一しよに一本の帶にくゝり合されて動いて居る、アメリカ印度人の女の樣に、赤ん坊籠の無いことと、背中合せでなくて母の向く方に子が向いて居るだけで、同じ樣におんぶして居る、小さい子供が歩けるか歩けな

いかの間から、弟や妹を背負つて居る、そして二つの頭は同じ位の大きさだ、そして其荷となつた赤ん坊は、姉さんの歩むことも遊ぶことも邪魔しない、たゞ寢るのだ、泣けばチョコ〳〵姉が、飛び飛びをするか又は少し話をすれば柔順くなる、年上の子供は年下の子供を大事にする、ヴェリ、グッドの樣に見える。

(C) 社交界の女。

髮は正確に漆仕上げて特異な姿で居る、人の批評等は眼中にない恰好だ、油で堅い、結んだり丸めたり、後頭に舵の樣な突出があつて、ピンで挿んである、そして總てが正確に出來上つて居る、髷の臺は不思議な姿だ、顏は繪どつてある、公衆の場所に滅多に出ない、そして煙草!。

(十二) 道路。

左側通行だ、俥が來ると、狹い町は逃げ場がないので轢かれさうで、危い所で助かる、（記者、アメリカは右側通行です）

（十三）鐵道。

小さい客車だ、英國の技師の計畫した狹軌式だ、一二等がある、三等には多熱を送つて來ない、一二等でも時々暖房のないことがある、然し電燈はある、トンネルと夜中は點火する、復線は東海道だけだ、汽車も左側通行で列車の數は多い、便利がよくて、安くて、貧乏な人でもよく旅行をすることが殊に目立つ、切符を買つて、改札してもらつて、客車に乘る、着驛で切符を渡す、それでも如何やら無料で乘車する人が多いらしい、但し調べて見た理ではない、腰掛と唐戸は低い。

（十四）靴の無い事。

家の外に靴を脱いで內に這入る、椅子が無くて座蒲團だ、日本人の脛の關節が柔かく出來て居るのか足を全く折り曲げて身體の下敷にする。

（十五）茶と煙草。

弱い茶だ、それでも外國人には神經過敏の原因となる、食事毎に又食事の間に水の代りに又茶を呑む、生水よりは善いかも知れない、お客には凡て茶を出す、弱い厭な煙草、男女共之を呑む、小さいパイプで二度乃至四度煙を吸へば無くなる、それで夜晝通じて飲むらしい、紙卷煙草は敎育家も又どんな職業の人も五分間毎に飲む、二十歲以下には禁煙の法律がある、然し嚴格に云へば、守られて居ない、そして實際は學生の全部が祕密に喫煙する、これが學生の遲鈍、睡眠不足と長時間の働きに能率の少い原因ではないか、そして背の高さの延びない原因ではないか。

（十六）夥多き賣店。

少い資本と商品、それでも家族が生きて行く、そして住宅の前に店がある。

（十七）學校の特異なる點。

冬に火の氣のない事、或敎師の說明によると、古代武士道の敎育とか言ふ、八幡では靴を取る（塵芥と肺結核の豫防だと、）學生は頭の毛を長くして分けることを禁ぜられて居る、氣障な風を嫌ふ爲だと、毎日六時間の課目がある、そして自修時間が少い、學校は長時間と、急がない、のろい科程だ、敎師達はニコチン毒と睡眠不足に、誰れも彼れもかゝつてる樣だ、敎育の方法は誨義法で、研究と歸納法は外國のことの樣だ。

＊　＊　＊　＊　＊

要するにヴォーリズさんは詩人であつて、藝術家である、それで宗敎に徹

底することが出來たと考へても滿更間違ひではあるまい、音樂家としても相當の位置を作る素質を充分に持つて居る人だ。

『人生の最高藝術は人を作るにあり』とでも言ふ、理想の實行に沒入する爲めに、萬里の波濤を越えて我國に來た、そして故國アメリカを去る時より、他の外國人の居ない純な日本の純な人々の中に住みたいと心願し又志願して、近江八幡町に落ちついたのである。

八

明治三十八年の夏が來た。

『親愛なるヴォーリズ先生、私は先生の聖書研究會に出席して居たYです、今度の休暇に歸省して兩親の許に居ります、私の家は酒造業ですから、今度は大に兩親に、毒水を造つて世の多くの人に賣る事の、憎むべき罪惡である事を訴へました、處が、父は大變に怒りまして、私が基督敎を研究する事に大反對です、聖書もさんびかも今は父母の目の屆く處に置く事が出來ません。

今私は聖書と讃美歌と書翰用紙を以て酒庫の中の大樽の内に身を祕めて居ります、私の神と交る處は此樽の中計りです、私の爲に祈つて被下い。』

遠く舞鶴の軍港附近よりバイブル・クラスの會員はヴォーリズさんに英文の消息を寄せた。

『愛敬するヴォーリズ樣、僕は休暇で田舍の伯父の許に居ります、僕は食事毎に、神に感謝して箸を取る事を聖書研究會にて敎はつてから、天地の中何一

つとして神より賜らずして、私共人間の食物となり衣服となるものがない事を悟りました、私は今朝神に祈つて箸を取る積りで眼を閉ぢて居ますと、私の鼻に堅い冷いものが當ります、ソツト目を開くと、隣に坐つて居ました兄がお箸で私の鼻をつまんだらしいのです。

私は兄と大議論をしました、そして再び祈りをして後、箸を取りました。

不信者の家庭の爲め祈つて被下い。』

伊吹山麓に歸つたKは、こんな手紙を寄せた、そしてヴォーリズさんは日記に其内容を省略して認めた。

『親愛なる敎師にして父なるヴォーリズ樣、私は肉身の父を失ひました、今度聖書研究會に出て靈の父のある事を知りまして喜びに堪へません、あなたは私の敎師にして又肉身の父の如く親切に神の存在、神は魂の父なる事、書

年期の私等の爲めに純潔なる童貞を守る事、禁酒禁煙の事等を敎へて被下つた事を感謝します、休暇後には大に努力して、同窓學生間に聖書研究會員を募りませう。』と言ふ樣な手紙も來た。

ヴォーリズさんは輕井澤の山の小屋で涙を以て、祈りを以て、是等の手紙を讀んだ。

九

『諸君、此處に、「心の淸き者は幸也、そは神を見る事を得べければ也」とあります、哲學の議論や宗敎の研究では神樣が解りません、先づ純眞な心を持

たねばなりません、學生時代は不純な心で童貞を汚す事が多いです』

『すべて色情を懷きて女を見るものは、既に心のうち姦淫したるなり、もし右の目なんぢを躓かせば、抉り出して棄てよ、五體の一つ亡びて全身地獄に投入れられぬは益也』キリストの御言は行爲よりも行ひの根である心に注意する樣に敎へられました。

心が汚れた上は行ひたるも同じ事です、全身全力を以て血を流す迄罪惡と戰へとあります、諸君、元氣潑溂たる青年が肺結核に罹つたり、心臟病、消化不良、神經衰弱、遲鈍性等になるのは何に原因しますか、米國YMCAの大立物モット博士の著『青年の誘惑』及『潔行集』の中に『一夜の精液を失うは血液四十九夜を失ふのと同じ事である、性慾の不正なる滿足は、貴い青春の鮮血を瞬間の快感の爲めに飽く事のない惡魔の手に絞り出されるのである』と言う意

味の事が書いてあります。露骨に言へば學生期の手淫です。

（マスターベーションと言ふ字を知つて居ますかとヴォーリズ氏が臆面なく滿堂の青年に向つて言ひ放した中、通譯者であつたM君及私等大勢の顔に時ならぬ紅潮がさしたのを今でも覺て居ます。記者）

諸君私等は神を知つたものです、肉に於ても世の人々より強く、靈に於ては特に先覺者たるべきではありませんか、禁酒禁煙は直接に自瀆の慾を起す刺戟を少くするのです。

運動と、祈りと、聖書を讀む事によつて諸君は心の清き人になつて彼下い」と言ふ樣な話しが或る夕ヴォーリズさんの熱心な聖書註釋の後にあつた、そして多くの學生は感動して聖書を讀む樣になつた。

性慾教育は其時分まで叫ばれて居なかつた、二十歲前後の學生共は性に目醒

めつゝ、醜惡な文學により中毒され、仲間の中の冒險者共の指導を受け、教場の中、寄宿舍、學生集會所、運動場等にても恥づべき言語、行動を、恥ぢないで汚れた罪惡に耽溺して居たのだ。

性に醒むる頃は精神の激動する頃である、戀愛は淨化された時に、愛他の精神を生み遂に宗教の奥に迄徹底する事になる、性慾の善導は實に必要であつて、我湖畔の人は此處に着眼して、善き指導者であつた。

暑中休暇後、再び聖書研究會が二組共、毎週、水、木の兩夕に開會された時、益盛んとなつた、そして學生の中に愈信仰に入る者も出來て來た。

第一着として、八幡商業學校基督教青年會が組織された、入會者は禁酒禁煙を誓つて盟約書に署名した。

或る日ヴォーリズさんは小さいオルガンを買つて來た、そして複音で種々の

曲を奏かれた、學生の多くは複音の音樂を知らなかつた、そして氣持よくキ！ボードの上を左右に動く奏者の十本の指に見とれて居るものもあつた。

その後、學校の各所から讃美歌の合唱が聞える樣になつた、學生の多くは小形の聖書と讃美歌を、制服のポッケトに入れて登校する、又或る者は、ヴオーリズさんの樣に頭の髮を長くして、眞中から分けたりした、脊廣服を着る眞似をするものも出來た。

十

明治三十八年の秋は、ヴオーリズ先生の熱烈なる信仰が實を結ぶ時であつた。

商業學校の四年級にて、最も謹直に、父親さんとも、爺いさんとも綽名されて居た、級長のKが決心して洗禮を受けた、ヴオーリズさんと同居した他のKも受洗した、Iも九月の末に受洗した。

八幡教會の傳道者は彦根より出張して來るOさんであつた、Oさんは實に痛快な人であつた、右手が無い上に、右の眼が鹽魚の眼のやうになつて居て、左の唯一つ殘つた目も强度の近眼なのだ、それで音聲は朗々として傳道說敎になると、私共の皷膜のビリ〳〵する程の大聲が出る、そして破鐘式でなくて美しく愉快な聲なのだ、或時Oさんは次のやうな說敎をした。

『僕の知人に痛快な醫者が居るんです、彼は煙草と戰つたが勝てなかつた、それで僕に何として戰つたらよいかと尋ねたので、「僕は天地の唯一の神に祈るのみ」と、一言答へて置いた、所が彼はまだクリスト敎を知らないから神に對

する祈りの方法を知つて居ない。

其妻君に聞くと、實に痛烈な事を此醫者がやつたものだ、諸君まあかうだ、彼が祈りをする事になると、家の二階に上つて、人には恰好が惡いものだから、襖を閉め切つて、十疊の部屋の眞ん中に、キチンと坐つて、大聲に

『天地に唯一つの神があるならば、其神に物申します。

私は煙草を只今より斷然廢止します、若し私の口に煙草が入りますなれば私を八つ裂きにして被下い、アーメン。』

とやつたんだ、さうすると暫くは煙草の慾がなくなつた、然し、又三四時間すると〻〻と慾が出て來たので、猛然と立つて診察中でも、午睡の最中でも何んでも構はん、二階の十疊の眞中に飛込んでは八つ裂を祈るんだ。

「神樣八つ裂にして下さい、若し私が煙草を吸ふ時には」アーメン。

と言つて三日三晩、戰つて勝つたよ、勝つた後の彼は、實に目醒しいクリスチャンになつた。

諸君は理屈を並べる閑に大に其肉體の慾と戰鬪して勝つ事を要するんだ、信仰は勝利者の上に明白に來るものである。

パウロは『爾等未だ肉の慾と戰ひて血を流すに至らず』と言つてる、諸君は血を持つて信仰の生活に入る必要がある。』

斯言ふ樣な調子で、Oさんは不具者特有の醜い顏に、天來の美しい輝を宿らせて、預言者バプテスマのヨハネを、しのばせて呉れた。

大鹽平八郎之傳、山崎闇齋之逸事、平田篤胤、吉田松陰、佐久間象山、横井平四郎、梅田雲濱等の例話が說敎の中に出て來る、或は鮮血を以てクリストの爲めに殉敎の死を遂げた、天草亂前後の物語りを聞かせて呉れる、と言ふ譯で、

今迄商業學校の生徒等は、ヴオーリズさんのバイブル・クラスで西洋のクリスト教、西洋の偉人に接して感心して居たものが、Oさんの新しい日本的のクリスト魂の説明を聞いたものだから實に教會は愉快な處となつた。

其教會は明治十三年頃から同志社の新島先生門下の、海老名、宮川、原田氏達の猛士が傳道して起したもので、明治二十年前後には相當の信徒數もあつたが、歐化政策の夢より國粹保存の反動の波に、揉み壞されて了つて、日露戰爭を終つた頃には、信徒は男四人、女五六人に過ぎなかつた、集會場は薄暗い家で深尾さんと言ふ婦人傳道師が住んで居た。家の二間續き、六疊と八疊に瀦戸火鉢が三つ程あつて、古い本箱に、塵に埋もれた福音書、表紙のない讃美歌、聖書講義錄や信仰上の雜著が並んで居た、ぼろオルガン一つ、壁は鼠色で、處々洋紙で、つゞくり張りがしてあつた、アメリカ傳道會社から來た日曜學校

の掛繪も散〻の目に會つて掛つて居た、疊も勿論ひどい。

ヴオーリズさんは米國の教會堂で、オルガンを受持つたりしたのだが、バイブオルガンやピアノに、ふさはしい手でガタ〻踏音のする、ぼろオルガンを彈いて居た、そして、青年共は破れ聲を擧げて、

「ほろぶる、此の世、
くち行く、我が身、
何をか賴まん、
十字架にすがる」

だの

「さまよへる者よ、立ち歸りて
天つ故郷の父を見よや」

とか

「我罪を洗ひて雪よりも白く

せよな」

等の歌を唱つた、盛んなものだつた、Oさんが唯一つの大事な左の目、それも細く血走つて脂の出るのを、白手袋をつけてある義手の掌の、指の間に挿んだハンカチを、右の手でスッと抜いて目を拭き〳〵、左の腕のポッツリと切り殘された、肱の處に、さんびかの本を持たせて、暗記して居られる歌の詞を、朗々たる美聲を以て唄つて行かれた、そして常に悲壯、痛烈、熱血を以て立つ傳道者として、私共學生を鼓舞せられた。

信仰の炎は火柱を擧げて來た。

商業學校の學生の三分の一以上は、バイブルを手にし讃美歌を唱ひだした。

私共、受洗したものゝ制服のポケットには皮表紙小形、赤金縁の聖書と同じ裝訂のさんびかゞあつた、課業と課業との間の休憩時間は、さんびかの研究や、聖書の默讀に費す事にした。

運動場に點々とバイブル・クラスに出入する生徒等が讀書して居る姿。

それは聖書を讀んで居るのであつた。

十一

『諸君バイブル・クラスだけでは進歩しないからYMCAを組織する事にしやう、私は東京の本部に交渉します』と言つて、ヴオーリズさんは或る晩、

數名の者に相談した。

黑板に、正三角を畫いてBody, Mind, Spirit の三字を美しく畫いて見せられた。

『ワイ・エム・シ・エーは、青年基督敎同盟とでも譯する結社で、英國の呉服屋の番頭が起した青年會です、正三角形が其記章であつて、即ち體育、智育に加ふるに靈育を目的として、クリスチャンが團結して、社會の爲めに相互の向上を計り又團體としての社會奉仕をする會です』と、通譯のM君が說明した、會衆は一も二もなく贊成して、憲法を作らうと言ふ事になつた。

一、我等は基督敎主義により相互の身體、知識、靈魂の向上を計る目的を以て本會を組織す

二、我等は青年間の惡弊、飲酒、喫煙を矯正せんが爲め、絕對、禁酒、禁煙を

宣言す

三、我等は聖書の研究會に毎週出席する事を約す

と言ふ樣な條項が決議されて、美濃形の半紙を舊式に綴ぢた帳面に、表紙には滋賀縣立商業學校基督敎青年會憲法及會員名簿

とMさんの美しい筆蹟がある本が準備された。

それから入會の宣誓者は、バイブル・クラスの後に、發起者達の環視の中に毛筆を心て墨、黑々と自署した。

その頃の近江新聞に、後に書く騷擾事件につれて、次の樣な記事が第一面に掲載された。

滋賀縣々立商業學校の耶蘇敎信者と非耶蘇派

『同校に於る耶蘇敎信者たる職員ヴォーリズ氏は英語敎授を以て任とす、其英

語を教授するに當りては、極めて親切叮嚀にして、各年級に對し平等的に通譯をなさしめ且つ愛情に切なるため、各年級を通じて自然に生徒間の敬慕を博し居れり、但し氏は平常教會に出入し教會の事務に盡力し居れるは云ふ迄もなし。偶々宮本文次郎氏は信者なるを以て二氏相提携し居れば、生徒も亦自然に感化を享けて教會に出入するもの多數なるに至れり、昨年末の事なりき、ヴオーリズ氏は自費にて新約全書百二十冊を購入し、教會所に來集せし生徒に之れを頒與せしことあり、是れ素より宗教を擴張するの一策なるに相違なし、而も外人としては多くは耶蘇教信者なれば同樣の擧をなすもの敢へて珍らしからず、殊に氏の自信によれば聖書頒布は學生が品性陶冶の一策に供したるやも亦知るべからず』

また或る時、新聞社が何思つたか御苦勞にも調査表を第一面の社説の代りに

出して呉れたりした。

『耶蘇信者の生徒と職員之れを調査するに左の如し。

第一年級一名川崎虎太郎、第二年級三名辻野長太郎、都甲直巳、奥田左門、第三年級一名吉田悦藏、第四年級十四名蘆田隆三、村田幸一郎、古長清丸、丸井佐太郎、北榮太郎、辻眞、渡邊就一、飯田健、富田峯太郎、山本治三郎野崎貞次郎、藤谷光之助、北川龜三郎、前野佐吉

の十九名にして以上は凡べて洗禮を受けし信者なり。

又職員にして洗禮を受けし信者は宮本文次郎、ウヰリヤム・メーレル・ヴオーリズの二氏なり。』

そして同新聞の浮世集の中に

M君は、『八幡の最もづくし』と題して

『宗教家の内で最も開化僧は森田澄、最もアーメン家は宮本文次郎』

と書いて貰つたりした。

十二

『諸君！』と黒板の前に突立つたのはクラスの勢力家、ベースボールのチャンピヨンで、テームのレフトを引受けて居る、Kであつた、無鐵砲の青年でどんなに強い球が直線に飛んで來ようが、高いフライ球が落下して來ようが、グローヴもつけないで、素手で、バチリと肉音を立て受け留るので有名な男だ。

『喧しい言ふな、オイ、諸君、此方向いて呉れ、默れ！』

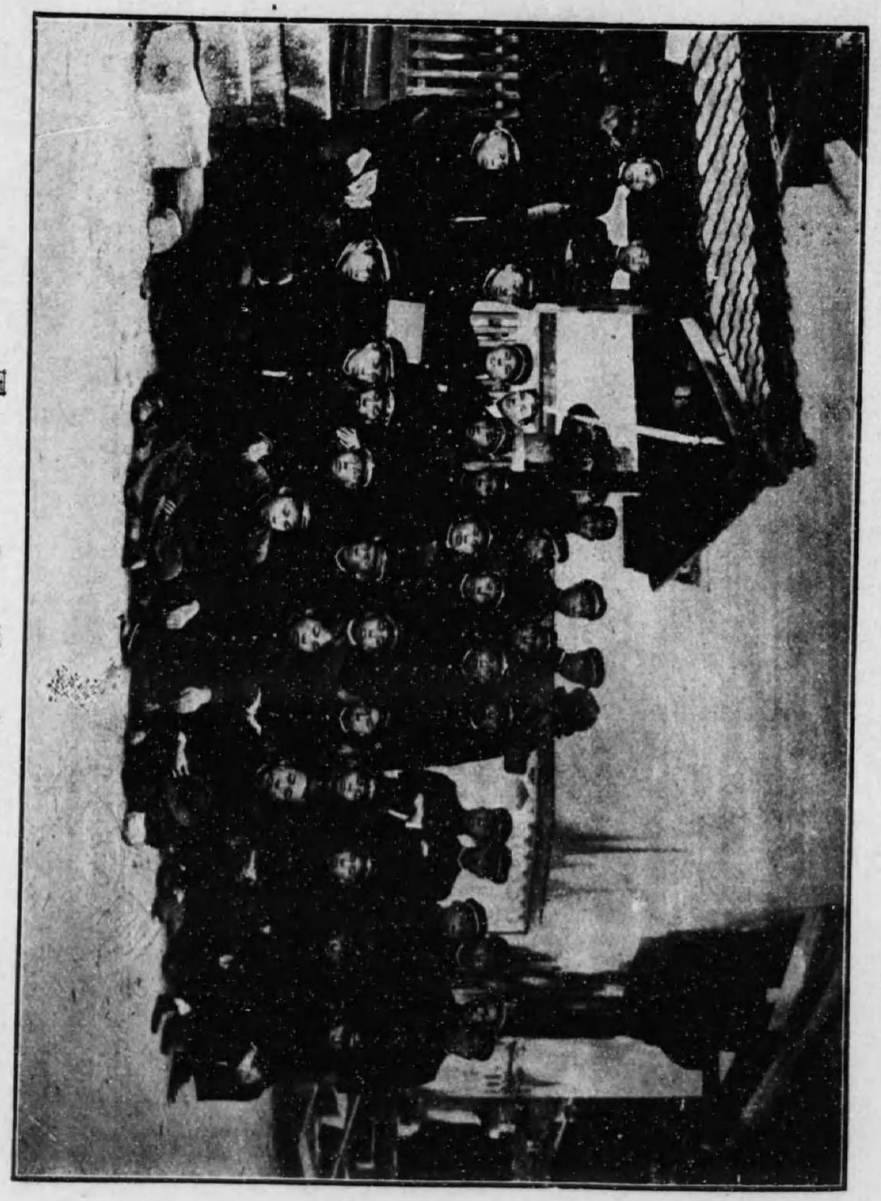


圖 ― の 派 蘇 耶

Kの顔が青黒く光るそして拳骨で教壇を破れん計りに叩いて居た、今、教師が商法の講義を濟して教員室に引揚た計りで、最早、放課後時間だから三年級の一同は教科書やインキ壺を纏めて居る時間であつた。

『なんや、なんや』と口々に呼へて黒板の方を見ると、Kが演説を始めた。

『僕等はもう三年級に居るのは三ケ月しかないんだ、そして、僕等の級はまだ目醒しい事もしないで最上級生になつて了ふのは、僕は殘念で堪らん。』

『木谷ッ、俺ら、腕か鳴つてるぞ』

『シッカリやれ、拳骨が風邪を引くぞ』

とKの共鳴者、鬼瓦と、赤猿がどなつた。

『四年級の奴等近頃、紳士振やがつて、チックをつけたり、インバネスを着たり、ボリ公のアーメン宗に入つたり』と言ふと

『僕等のクラスにも、バテレンの悦公がゐるぞ』
『ストライキやつてやれ、悦から始めたれ』と言ふ者があつた。
『そうガヤ〳〵言ふな、木谷の言ふ事を聞いてやれ』と赤猿が言ふた。
『僕はもう堪らんから、僕一人でも下級生の生意氣な奴に鐵拳制裁を加へてやつて、最上級生のフヌケ共に、男子の意氣を見せてやる、賛成する者はないか』
『あるぞ〳〵』
クリスチャンになつた、Iは其場をはづした、彼は三年級只一人のアーメン黨であつたのだ。
『生意氣な奴の名前を此黒板に書いて呉れ給へ、そして諸君の賛成があつたら、明日の朝雨中體操場に呼出して、皆でストライキをやつてやる事にしよ

う。』とKは結論した。
黒板に白墨で十人位の名が出る。
一々紹介者が説明する、其理由は、上級生にお辭儀をしない奴、袴のつけ方が生意氣だ、此奴の顔を見ると癪に觸るからやつてやれ、バテレン臭い奴だ、等とあつてそれが一々三十餘名の三年級生の眞ん中に、オビキ出されて鐵拳の五六十から二三百迄に値する罪狀なのだから堪らない。

＊　＊　＊　＊　＊

『I君、一寸來て呉れ給へ』
Iは變に思つた、そして少し青くなつたが、呼出しに來た青瓢單と命名され た、日頃をとなしい同級生について行つた、其日は雨が降つて居た、そして放課後、教室から外に出ようとする時だつた、廊下を少し行くと、誰も居ない教

室に青瓢單が入れと言ふので、氣味惡く入つた、ドヤ〳〵と同級生全部が來てIを其眞中に入れて圓陣を作つた。

『オイ』と、壺と仇名のある、小い年寄つた同級生が口を切つた。

『君はクラスの秘密をヴオーリズさんに密告するんださうだね』

Iは頭をたれた、さうすると背部から拳骨で背中を突く者があつた。

『クラスの秘密を賣る奴は制裁するぞ』

風雲は急になつた、Iは心臟が變調になつた事と、クリスチャンの殉教の話が頭に浮んだ、それから數日前同級の夏蜜柑君から顏の眞中、鼻の上をイヤと言ふ程毆打られて鼻血の始末に困つた事やら、Sに數壇へ投げつけられた事やらバテレン、國賊、賣國奴と同級生から唾をはきかけられた事を思出して情なくなつて來て居た、然し、キリストとヴオーリズさんは捨られないと思つて、

『クラスの秘密て、何んですか、僕に言つて被下い』と返答した。

『クラスの秘密がわからんのか、君は、赤猿が酒を飲んだ事、俺が煙草を吹かす事をヴオーリズに言つたゞらう』

『それはクラスの秘密ではありません、像はT君やK君の爲めにヴオーリズさんと相談して、禁酒禁煙のYMCAに入會して貰ふ計畫をしたんです』

Iの答は小さい聲でも皆に聞へたらしかつた。

『議論せんと、なぐれ〳〵』

『おいたれ、おいたれ、可哀想に』

『同級生をなぐるのは名譽やないぞ』

『なぐれ〳〵』

Iは鐵拳の雨を覺悟した、そして默つて祈つた。

『神様救ふて被下い、私をなぐる人達もこんな事をせぬ人として被下い』

暫くして、ドヤ〳〵と大勢の足音に目を開くと、同級生は、ストライキを中止して向ふに行つた。

感謝々々、神に感謝して、Iは其下宿ヴォーリズさんの借家に戻つた。

其翌日だ

暴行が決行された、年少の學生を一人々々雨中體操場にオビキ出して來ては、三年級生一同で、毆打の限りを盡した、寄宿舍の病室に寢て居た一生徒を引出して、竹刀と、皮のスリッパーと、拳骨を持つて、瀕死の狀態迄になぐりつけた、なぐつた青年達の拳は血ににじんで居た、そして其學生は、淡路の者で親が來て連れて歸つたが後に死んで了つたと言ふ事であつた、雨中體操場は中から錠をかけて了つて、數人の下級生をストライキして居た最中、教師の一人N

先生が入口の戸の節穴から中を眺たのを、内側に居た、暴動の主謀者、Oが拳骨を固めて、其眼の上を、イヤと云ふ程なぐりつけた、其同じ節穴より外を見た學生は、

『オイ〳〵、N先生が、顏に手をあてゝ逃げて行つたぞ』と言ふた。

ストライキの現場を教師に見つけられたから、其暴行も自然中止となつて眞青に慄えて居る、下級生達を其場に取殘して、一同、バラ〳〵に校門を出た、

そして六日して後、近江新聞に左の記事が出て居つた。

商業學生の大擧暴行　（明治三十九年一月二十六日）

『去る二十日本縣立商業學校内に於て、本科三年級生徒嵯峨瀬民次大谷豐太郎の兩名主謀者となり、同級生徒の過半數（別報に依れば同級全生徒なりとも云ふ）之に雷同して下級生徒四名を毆打し負傷せしめたる爲め遂に同級全生徒

は或は退學或は停學或は訓戒等の處分を受くるに至りたり、今其詳細を聞くに初め嵯峨瀬等が暴行を加へんと目指し密かに謀し合したるは本科一二年及び豫科の生徒中十數名にして同日先づ其中最も敵視したる某々四名を雨中體操場内に誘ひ行き矢庭に包圍して鐵拳を飛ばし散々に毆打の蠻行を逞ふし中には器物を以て頭部を亂打し出血淋漓たらしむるに至れるものすらありしが此不穩の騒動を聞きたる生徒主任其他の職員等現場に駈け付け一方既に負傷したる四名の生徒を救ひ出して鄭重に手當を施し一方次いで暴行を加へられんとする生徒を保護し直ちに主謀者及び下手人の取調べをなし尚ほ斯かる重大事件なれば輕忽に處置すべからずと其後引續き綿密に調査の歩を進めたるが其原因は別段深き意趣遺恨等ありての事には非らず要するに彼等は下級生の身にも顧みず平素上級生に對して敬意を缺きたりとか所謂生意氣なりと云ふ程の憎しみと自己の

威勢を張らんと欲したるに過ぎざる由なれども苟くも名を忠告に藉りて右の如き亂暴の行爲をなすが如きは許すべからざる事なるのみならず將來實業界に身を投ぜんとするものゝ爲めには一層嚴戒せざるべからざる所今是等不穩の擧動をなしたるものゝ處分を寛大にせんか他の生徒のため或は惡影響を及ぼさんも知れざるを以て心情多少忍び難き點なきに非らざるも斷然嚴重の措置を執るべしと二十三日夫々副保證人を學校に呼び出し安場校長より一々將來の理由を懇話し同級全生徒に對し左の處分を行ひたりと云ふ實に當然の處斷といふべし。

退學　二名　　無期停學　三名　　一ヶ月停學　一名　　三日間停學　十六名　　訓戒　廿三名

中等教育時代に在るもの往々客氣に乘じ蠻勇を誇り不穩粗暴の行ひをなし却て得たりとする事あるを聞く苦々しき擧動にて沙汰の限りといふべし。』

一三

ストライキがあつた日の翌晩、暗闇の夜であつた、Iはヴォーリズさんの書齋でリンコルン傳を讀んで居た、Iはヤット英文の「天路歴程」を讀み終つたので、生れて始めて一冊の原書を、しかも四百頁もあるものを讀みこなしたので、嬉しくて夢中になつて第二の英書を讀んで居た。

『I君、一寸來て呉れ給へ』

障子の外に芋蟲と仇名された同級生が吹き消した計りの提灯を片手に、立つた居た。

『今なあ、山田の處でクラスの者が寄つて昨日のストライキの始末やら、今日羽生先生に呼び出されてなあ、どうやら放校にでもなりさうな、嵯峨瀬や大谷や其外二三人の爲めに、相談しとるのやから君、一寸來て呉れ給へ』

『うん行かう』と、Iは本を閉ぢて芋蟲と一しよに外に出た、呼びに來た芋蟲について暗い町を東へ三丁行つて北に折れると右側に、小さいランプ屋があつた、それが山田の下宿だつた。

裏の八疊の離れに皆で寄つて居た。

『ヤアI君』

二日前にクラスの秘密を漏らす男と言ふので鐵拳制裁を加へようとした同級生三十餘名が、今晩に限つて馬鹿に愛想がよかつた。

『ヤアI君、遲うから濟まなんだなあ』

『君、まあ、坐り給へ、僕等は今度のストライキに就て、少々暴行をやり過きた處へ、安場校長や、羽生教頭の頭が隨分强硬なんだから、クラスからどうやら二三人の犧牲者を出さんならん事になつたんや、處が僕等は親から毎月金を貰つて居てもう今年で最上級生となるし、來年は社會に出る時になつて退校處分を受けると、親が泣くからな、君、君はヴォーリズさんに馬鹿に信用があるし、教員等にも連絡があるから、一つ、今度は僕等の爲めに、運動して貰ひたいのやがなあ、どうや君、僕等は今度は徹底して改心するからヴォーリズさんに保證して貰つて放校や無期停學にならん樣にして呉れ給へ、何んしろ、もう三學期の學年試驗が來るからな、J君頼みまつせ』

Iは頭をたれて居たが急に身を起して

『諸君、僕はクリスチャンだから、改心した時は神に其事を申し上げて後、

ヴォーリズさんや又他の先生達に運動することにしたい、今、祈禱するから、皆で眼を閉ぢて頭を下げてて下さい、さあ、僕は祈りをするからね』

昨日迄は血氣にまかせて拳から血が出る程に下級生をなぐつた仲間が、一時にしんとした、不思議、奇蹟、突飛とでも言はねばならぬ光景であつた。

『天の神樣、私共の心の底の悔悟の涙を受けて下さい、暴行したのは實は惡いことでした、どうぞ、清い善良な學生として此一團のものを改心させて下さい、イエス・キリストの名によつて願ひ奉つります』

『アーメン』

Iは感激の心を打開けて神に祈つて、山田の下宿を出た、そして同級生の一人は提灯をつけてヴォーリズさんの家迄送つて來た。

餘りに血氣にまかせた暴行を演じた反動か、クラスの一同は肅然となつて居

た、ヴオーリズさんは職員中に相當熱心に運動して呉れたが、結局、大谷と嵯峨瀬は退校處分になり、三名は無期停學で、一年を棒に振つて落第する事になつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

暫くすると近江新報に變な記事を投書したものがあつた。

滋賀縣商業學校毆打事件眞相

鶴鳴山人（投）

（當局者の猛省を促す）

今回出來せし事件につき同校長は曰く、何等の原因あるに非ず、只單に三年級が最早四年生の昇級するの期に臨み下級生に威力を張らんが爲め只淺墓なる考へより出でしなりと、又曰く今回の事たるや主任教師は十分愼重に之が調査

をなしたり、從前はイザ知らず八幡町へ移轉後は斯かる事件決してなかりし（實は隨分あるなり）今之れを等閑に附せば惡弊を增長せん、依て職員會議の結果斷然の處分をなしたりと、斯かる際に斯かる處置ありしは實に當然の事と謂ふべし、乍併之が事實を探索するに意外なる原因あるを知れり。

處分の不公平なること、主謀者と見做され退學を命ぜられし二名は決して主謀者にあらず、教師の訊問の冷酷にして只汝等は平素の行爲良からず、今回の事も汝等が煽動したるならんと、是れを辯解せんとせば叱責せられ、殆んど其眞實を言はしむるの時間を與へず、斷定。否、認定せられたるものなり、其一人の如きは教師の煽動なる言葉の意味を解する能はず、只「ボンヤリ」と「ヘー」と言ひつゝ考へ居りしに、最早宜し去れと言はれ、遂に主謀者の名を蒙れりと之を他生に聞くに皆曰く吾々は平素の鬱憤を晴せしにて主謀者たるものな

し、只二人は平素の行爲餘り良からざると「クリスチャン」生の誣言とにより彼等は「クリスチャン」攻擊の犧牲となれりと、又曰く一ヶ月停學を命ぜられたるものゝ如き、性極めて温柔、人が打てと勸むるも恐れ居る位のものにして、手を下さざりしに口咄なると僧侶の子弟なるとにより處分に遭ひしなり、又「クリスチャン」生中手を下せしものにて最も暴行ありしものが「クリスチャン」先生の援護により三日の停學にて濟みしものあり、或は全く罪を免れしものあり、要するに調査甚粗漏にして處分を受けし生徒よりも寧ろ免れた生徒の方非常に激し居れり。

眞相。當商業學校職員中には二名の耶蘇敎信者あり外國雇敎師（熱心なる信者）と協力して熱心該敎に生徒を引入れんと努め、青年會を組織し其名の下に聖書を講じ該敎を信ぜしものには洗禮を受けしめ、目下洗禮を受けしもの二

十餘名、青年會にて聖書の講義を聽くもの百餘名ありと云ふ、然るに右二名の職員は舍監たる故を以て寄宿舍は土曜日大祭日祝日等の外は門限ありて夜中外出を禁じあるにも拘はらず、青年會の聖書聽講に行くもの及び敎會に行くものには深更迄も外出を許され居れり、生徒中には耶蘇敎を信ずるにあらずして名を假りて外出するものあり、或は敎會に行けば只妙齡の少女に邂逅するを樂みとして敎會へ行くものありと云ふ、爲めに醜聞汚行少からず、又右等敎師は平素敎室に於て生徒を誡むるに「クリスト」的訓諭をなすと云ふ。

斯かる事實あるを以て生徒間には自然耶蘇派、非耶蘇派なる二派を生ずるに至れり、耶蘇派生中には衣服を飾るもの、頭髪を長く分くるもの、チック美顏水等を用ゐるもの、眼鏡を掛くるもの等概して生意氣なるもの多し、非耶蘇派生は常に之を攻擊し、殊に四年生某々を目指しつゝありしなり、然るに三年生

の大部分は非耶蘇派たるを以て、茲に平素の憤怒凝結して遂に耶蘇派生の生意氣をこらさん爲め先づ下級生より始め、遂に四年生に及ぼさんの意志ならんも、中途にして教師の發見する所となり其の目的を達し得ざりしなりと云ふ、要するに今回事件の原因は耶蘇派排斥より起りしものと謂ふべし。

抑々我國は皇祖皇宗の御遺訓ありて教育の方針は獨り小學校のみならず上は大學に至る迄教育勅語の御精神に基づかざるべからず、然るに宗教的ならざる本縣商業學校に於て、宗教の力により生徒を訓誨するの教師ありとは奇怪千萬なりと云ふべし、我國憲法に於て信仰の自由は許るされをるを以て、教師自身己が信ぜる宗教を信ずるは我輩の敢へて容喙する所に非ずと雖も教師自身が信ずるの故を以て之れを我が教育する生徒に及ぼすは我國に於て教師の德義上許さざる所なりとす、法令上注意する所もありしか？（往年教育と宗教の衝突論

識者の問題となりしとあり）中等程度の學生たるや未だ意志の柔弱なるを以て教師なるもの之を宗教に引き入るはいと易きことゝ云ふべし、我輩は此の時代の生徒に宗教を信ぜしむるは大に心身の發達上害ありと信ず、殊に商業家の子弟を教育するに於てをや、父兄も亦我子弟を此校に入學せしむるはヤソ教信者を作るに非ずして他日社會に出で敏活なる商業家を作る目的たるや明けし。

今回の事件たるや其原因耶蘇排斥より起りたるものなるに、之が局に當るもの其原因の討究をなさずして單に少年の血氣に出でしものと看過し、以上論ずるが如き職員間に（職員間にも兩派ありと云ふ）軋轢を生じ今後同校の一大紛擾を來すこと明なり、我輩大に杞憂を來たすこと明なり、我輩大に杞憂す、希くは當局者たるもの大に同校教育の刷新を圖り事を未發に防がんことを。

＊　＊　＊　＊　＊

眞赤なウソ、否眞黑な捏造記事とは實に此投書であつた、三年級中のクリスチャンはI一人であつて、ストライキの相談のとき既にクラスの秘密を賣る者として同級生間の暴行を受けんとした、更にストライキの現場は狂亂の姿となりて、竹刀やナイフを振り廻す同級生を留めたのもIであり、且つIは三日の停學なんか受けて居ない。

前記の記事が近江新報に掲載されると其翌日から得體も知れぬ彌次投書が出るわ出るわ、殆んど毎日「商業學校の眞相」だとか「安場校長の話」だとか「本縣商業學校問題に付縣下の有志諸君に寄す」とか無責任な「寄せ文欄」のハガキ投書などあつた、遂に「商業學校は宗教學校たらんとす、須く雇教師ヴォーリズを解雇すべし」と叫ぶものが出て來たり、ヴォーリズさんは、教會に出入する一美人と怪しい等書き出した。

バイブル・クラスの或夕

『ヴォーリズさん、近頃新聞に變な惡い記事が出て、あのまゝ捨てゝ置く事が出來ないと思ひます、どうしませう』

と一人が言ふと、ヴォーリズさんは、

『捨てゝ置きましよう、我等は誠實に神の子として靜かに勉强しましよう、又共に敵の爲めにも祈りましよう』

と答へた計りであつた。

それから、クリスチャンの學生等は毎朝ヴォーリズさんの借家に集つて、祈禱會を開く事になつた。

學校には、祈り會を終つた二十名餘の學生がヴォーリズさんを取卷いて、登校する途中で讃美歌を唱ふものや、聖書を讀み讀み歩むものもあつた。十九名のクリスチャン學生は白熱した感激的信仰を持つ樣になつて、商業學校三百の生徒間に盛んに福音の傳道が始まつた。

敎會の會員となつた小學女敎師N嬢が腦脊髓炎にかゝつて危篤だと聞いた青年の一團は、毎朝祈り會で彼の女の爲めに祈つたり、其宅を訪ねて三々五々、祈りに行つたりした、處がとう〳〵N嬢は永眠した。

そこで、クリスチャン學生は大擧して、學校を休んで葬式に列した、銘旗を持ち棺をかく、花輪を持つ、其他何でも葬式人足の役は青年學生が喜んで當つた、敎會で式を終つて愈々西山の火葬場に行く葬列を作つて居たとき、M先生が飛んで來た、そして其時の顏は靑く沈んで居た。

『オイ、諸君、學生諸君は一寸集つて下さい』

Mさんが來た、不安な顏をして僕等を呼んでゐる、と言ふので、一隅に四五人行つた、他のものはMさんが何と言うたとて、葬列を他所にするものでないとて離れないものが多數あつた。

『君等は考へて行動して貰はんと困るね、信者になる事もよい、敎會の爲めに盡すこともよい、然し近頃の新聞にあんなにクリスチャン退治をやつて居る最中、學校を休んでまで敎會員の中でも妙齡の婦人の爲めに葬式に來るなんて、

大分熱が高過ぎるぢやないか
と言つて、今更役を引受けて居るもの全部を引上る事も出來ないし、僕は實に困つた、ヒョットすると、こんな事からヴォーリズ先生が餘りに宗教熱心と言ふので學校に居られん事になるかも知れんと僕は心配するんだ。それで君等の中で、役のない會葬者は皆登校して呉れ給へ、僕は頼むよ』

M先生はクリスチャンであつた、そして最も詳しく、嶮惡になつて行く、教員仲間の空氣と、縣廳の役人達の意向を知つて居た、又近頃のヤソ退治の新聞記事の影響を感じて居たのだ。

それでも學生は一人も引揚げるものがなかつたので、Mさんはスゴ〳〵心配顔して學校へ歸つた。

葬式の後にN嬢一家は主イエスを信ずる家庭となつた、N子の父は信仰の告

白をした時、クリスチャンの同胞主義の實行より神を認めたと言ふた。

それから商業學校の學生間にYMBAが組織された、佛教青年會である。東本願寺の派遣僧　伏見のM師を中心として數十名の學生が團結した、そして其發會式は盛大なもので、西の別院本堂に、數百の學生と有志が集まつた、そしてクリスチャンの學生は賓客として招待された。佛徒は『しつかり宗教運動をやれ、東本願寺が後援するから』と言うて居ると風評するものがあつた。

リアクションの傾向が見えた、國粹保存だの日本主義だのが、學生間に叫ばれた。佛教も外國より輸入された宗教である事は棚に上げて、外國に降參する國賊ヤソバテレン共と言ふ事になつた。

或る日、北榮太郎が學校の運動場で、ベースボールのバットで頭をしたゝかに叩かれて卒倒した、そして加害者のSが今にも放校されんとした事があつた。

北は頭を繃帶でグル〜〜巻きにして居たが、其姿で教員室の生徒係に出頭して加害者Sの爲めに辯解してやつた、そして其處分を取下げた、北はクリスチャンであつた、其Sは校内で有名な亂暴者で、ヤソ排斥の大將でピストルを持つて居るので恐ろしがられた、ニキビだらけの青年で、ヴォーリズを殺せと叫んだのは此男である。

もう一人物騷な男があつた、Wと言ふので、尋常商業の一年生、年齢十五六歳の仲間に入つた二十歳を過した男で、先生達の樣な鬚を生やし、其頃流行のインバネスを着込んで、煙草入を腰にさして登校する、それが酒を飲んで、懷の白鞘を拔いて見せる氣味の惡い青年だつた、國粹主義で、ヴォーリズは國賊の源だから、此白刄の錆にしてやると揚言して居た。

SとWは常に兄弟分の樣にして、校内で幅を利かして居て、其鐵拳を見舞れ

たものはザラに多かつた、又鐵拳の洗禮を受けて子分の樣になつたものも相當にあつた。

『ヴォーリズさん、SとWが、あなたを殺すと言ふてますぜ』と注進するものがあつた時、ヴォーリズさんは柔しく笑つて居た。

其内或る夜Kと言ふヴォーリズさんと同居して居るクリスチャンが、鎭守の森の散歩から歸る途中、欄干つきのお宮の橋から、何者とも知れぬ二三人の黑い影に襲はれて川の中に投込まれて、ズブ濕れ姿で歸つて來た、それから殆んど毎日事故があつた、叩られたもの、突飛されたもの、威喝されたものが、毎日其出來事をヴォーリズさんに告げた。

毎朝の祈り會は愈々盛んになつた。

ヴォーリズさんは、そろ〜〜其顏の薔薇色を失ひかけた、そして、腸が惡い

腸が痛いと、持病の様に言ふ様になつて來た、或る日SとWがヴォーリズさんを訪ねた、そしてクリスチャンにして呉れと志願した、ヴォーリズさんは驚ろいて其譯を聞くと、

Sは北の愛敵の實行に感激したと言つた、Wは祈り會の庭に忍んで居て偵察した時に非常に感じたと言ふた。

クリスチャン連中は心から萬歳を稱へて二人の新兄弟を團體に加へて、親睦會を催した、其時、

路可傳十五章の放蕩息子の話を脚色して素人劇をやつた、Wが放蕩息子でSが誘惑者になつた、そして一齣一齣、深刻な悔改めの表情がよく出來た。

さうかうして、明治三十九年の三月が來た。

そして上級の熱心黨クリスチャン學生の大部分は、僅かに三名の同志を校内

に殘して、八幡を去つた。

M先生も、旅行免狀を取つて、ヴォーリズさんの母校に遊學する事となり、遠く北米の天地に去つた、それで、四月、新學年が始まると、今迄の賑やかなヴォーリズさんの家は急激に淋しくなつた、そして主人公も腹の病が日增しに悪くなつて蒼白な顏に、深い皺が寄つて、梅雨の頃には、京都の同志社病院に入院して了つた。

Iはレインコートを着た、ヴォーリズさんを抱へて二人乘り錢輪の車に乘つて、京都のフェルプスさんの宅迄送つて行つたが、途中ヴォーリズさんが青い顏をして、

『あなたは私の眞身の弟の様に、よく介抱して呉れて實に嬉しい、然し今度は私も日本の土になるでしよう』と言うた。

痩せて細く、青黒くなつた身體をヴオーリズさんは京都の友人、當時京都市YMCAの名譽幹事フエルプス氏の宅に横たへて居た、邸は京都御所の裏、今出川通りの古びた洋館で、庭の樹木のみ美しい綠を、梅雨の雨上りの、暖かな太陽に向けて誇つて居た。

Iは暫々見舞に行つた、そしてヴオーリズさんがだん〳〵惡くなるのを悲んだ、Iは英語の會話が多少出來る自信を持つて居たが、フエルプス夫人の女聲で學生に親んだ事のない、生粹の英語が聞き取れないのに、ドキマギしながら

家族の一人の樣に待遇されて食卓についた、二階の一室に死期を待つ樣に見えたヴオーリズさんを想出す毎に涙ぐましくなつた。

『ミセス・フエルプス、一體メレルさんはどうなるのです』其頃からIはヴオーリズさんを、フエルプスさんと同じ樣にメレル、メレルとファースト・ネームで呼ぶ事になつた。

『ドクターの話しでは腸結核だらうと言ふのですから、出來たら今の內に本國へ歸るとよいと想ひます』

Iはホームと言ふ言葉を本國の意味のある事を其時初めて知つた。

『しかし、神戸のサナトリアムで、一二ヶ月養生したがよいとすゝめて居る處ですよ』と同夫人が言葉をついだ。

Iはサナトリアムと言ふ事が解らないので、療養所と言ふ意味である事を說

明して貰つた、それからIはフエルプスさんの處で、ヴオーリズさんと一しよに泊る事にした、勿論學校は休んで居た。

四五日してから、ヴオーリズさんは神戸の布引の瀧の傍のサナトリアムに入院したので、Iは八幡の暗い大きな家に歸つた、半ケ月程して、或る日の午後突然六尺豐かなフエルプスさんが、ヴオーリズさんを毛布に包む樣にして人力車に乘せて八幡にやつて來た。

『どうしたんです』Iは驚いて尋ねた。

『メレルは今晩の急行で横濱へ行つて、明後日出帆のエンプレスで、合衆國へ歸ります、私はメレルを寢臺に寢かして置いて、手廻りの品を集めて荷造りして今夜立たせようと思ひます』

そして時間がないと言ふので、ドシ〳〵靴のまゝ、疊敷の處も早足で這入つて

來られて、ヴオーリズさんの寢臺の用意をコックに命じ、自分はステーマー・ラッグのかぶせてある大形のトランクを部屋の眞中に引出して、衣類やら、何やら手廻りの品をつめ始めた、ヴオーリズさんは、靜かに靜かに、ほんに元氣のない龜のあゆみのやうに、表口より奥の間に獨りで歩んで來て、Iの心配らしい顏を見て、兩眼に涙ぐましい濕みを光らせて居た。Iは胸の中に『殉教者！神よ再び彼に健康な身體を與へて此日本に、此湖の畔に歸らせ給へ』と祈つた。

Iは涙を隱しながら、フエルプス氏を手傳つて、ヴオーリズさんの荷造を二三時間ですませた、そして賴んだ運送屋は馬車を一臺持つて來て、トランク二個、行李、スートケースを無雜作に運んで行つた。

『メレル、書籍はどうするの、それからまだ大分荷造の出來ないものもあるがそれはどうしよう』

『フェルプスさん、私はきつと再び歸つて來られさうですから、其まゝ置いときましよう、近頃何んだか病氣も大丈夫よくなると言ふ確信が出來ましたからね、そして横濱でも往復切符を買つて被下い、半年もするとまた此家に歸る事にきめますから、』と寢臺の上の病人がさう言つて身を起した。

『Iさん、私はね、今度歸國したら、お土産に、學生青年會館を八幡町の中央に建てようと思ふんです、あなたは、町の中央に土地を見つけて被下い、私も少々貯金が出來たし、國に歸れば特志の友人もあるからね、二十人位の寄宿舍と、三百人位の集會する場所を作りましよう、私は一たんは、近々に日本の土になると想ふたが、何んだかまだ〳〵働ける樣になると思ふ夢を見て居るんです。お互に太平洋を距てゝ祈りをしようね』

フェルプスさんはIの顏を見て淋しく、或る合圖をする樣に笑つて居た、そ

して其目には病人に知らせてならぬ或る消息がある樣だつた。

夕食を濟ませると、三四人の教會の人達が集いてやつて來た、そしてまだ夏に早い晩春の星空の下に、人力車をつらねてあの八幡町の郊外の長い繩手をステーションへ指して走つた。

Iはヴォーリズさんを米原迄見送つた、九時過であつた、もう離別すべき時が來た、上り急行は今五分にして着すると言ふ時、ヴォーリズさんと腕を組んでプラットの南端に歩んで居ると、月に光る湖面を距てゝ遠く比良山の上空に壯大な尾を引く彗星があつた。

『ハレース、コメット！』

『ハレー彗星が出ましたね、悲しい別れの不思議な記念ですね、メレル、早く歸つて被下い、私は祈ります』

Ｉはヴォーリズさんと握手しつゝ泣いた、汽車は月空に黒い煙を殘して東へ疾走した、Ｉは夜半八幡に歸りて、ヴォーリズさんの許可を得て自分の寢室にした、二階の六疊の鐵の寢臺に身を横たへて羽枕に顏を埋めて泣いた。

『我等の父なる神、私共の目をあなたに向しめた恩人、愛師ヴォーリズさんを必ず再び湖の國へ歸らせて被下い、それは神の國の進歩となりますから』と。後に聞けば、ヴォーリズさんは不治の病を持つて居るので再び日本に來ることはあるまいとて、フェルプスさんはヴォーリズさんに片道切符を横濱で渡して、ヴォーリズさんの貯金を全部米國の爲替に替へて了つたが、ヴォーリズさんは一たん仕方なしに承知しても、フェルプスさんが歸つて了うと東京の友人から金を借りて直に切符代を增拂した、そして通用期間六ヶ月の往復切符を買ひ直したのであつた。

それから明治三十九年の六月、ヴォーリズさんは富士山と櫻の國を後ろにして星條旗の飜る國、ロッキー山の麓へ歸つて了つた。

一六

『親愛なる敎父ヴォーリズ樣

私は今生れて初めて味ふ大陸の氣分に浸つて居ります、あなたが買ふて被下つた萬年筆を執つて遠く太平洋の彼方、ロッキー山脈の東、コロラドの高原を想像して居ます、私は今、滿洲の中央奉天府の郊外淸朝の廟所、草むす北陵の。石獸が居並んで居る庭に、茶褐色の際しない高粱畑を眺めて居ります。

あなたは此初夏、太平洋を渡られました、私は此真夏に玄海灘と黄海を渡りました、あなたは東しましたそして私は西しました、詩人キプリングは西と東は永久に一致せずとか唱つたさうですが、あなたと私は太平洋を距てゝも、キリストの結び給ひし兄弟の心は親しいものですね。

私は今、あなたから離れて行く最長の距離——奉天とデンヴァー市——より此手紙を出して、私は明日、方向を逆轉して再び一歩々々、あなたに近く事になる事を喜びます、あなたは、早く健康を回復して歸朝して被下い。未だ見ぬ、御兩親と弟様によろしく。

明治三十九年八月十日

Iは書き終つて、涙ぐんで祈つた。

『天の神様、メレルはあなたの愛子です、必ず日本へ再び歸る様にして被下い』

繰返し言を祈るなと、キリストの教にあつても、Iの祈りは繰返される事が多かつた。

北陵の見物を終へてIは高粱畑の中の一筋道を、學友OとHと三人で肩を揃へて、奉天府北門へ返つて來た時に、大陸の澄み切つた西の空は、赫々と光る夕陽に輝されて居た。陸のうねりと、海のうねりとを考へたり、人影のない曠野と、せゝこましい琵琶湖畔の景色などを想ふたりしつゝ、泥と汗にまみれた滿洲苦力の様になつて宿に歸つた。

其翌日Iは七人の馬賊が斬殺される刑を見た。

半裸體の男の首のない死體が七つ轉んだ、筋肉隆々たる一粒撰びにしても珍しい、七ッの肉の持主の首が飛んだ　鮮血は醤油徳利が轉んだ様に、ダク〳〵

と出た、そして切り跡の首筋は脊髄を白く見せて、ぢり〳〵縮んで居た。
其血を犬が飲む、女が團子を串の先につけて、刑死人の温かい血に浸して居た。

それから首塚を見ては、卒倒せん計りに驚いた、四疊半敷位の煉瓦壁に圍まれた空け放しの家に、人の首が數百も無雜作にほうりこんであつた、下積みの首は白骨に近く、中程は半づるけ、上は生首で、女の首、老人の首、堂々たる偉丈夫の首、稀には切り損なつた變形の首もあつた。

Iは支那に渡つて初めて、日本の文化の隣國より優つて居る事を體驗した、そして同時に宣教師や教師として歐米より日本に渡來する人等が、日本をどんなに見るだらうかと考へて見た、今度ヴォーリズさんが再び日本に來られたなら、眞の親切がして見たい氣がした、Iは夏の終り頃朝鮮を通過して國に歸つた。

『親愛なるベビー様
私の身體は日増しによくなります、九月には再び近江八幡に着きましよう、神は私を御導きになりますから、諸兄弟によろしく。メレル』
と言ふ文字のある、美しい繪葉書がIの神戸の家に來て居て、Iを待つて居た。

Iは嬉しくて、直ちに以賽亞書と詩篇を英文聖書で毎日讀む事にした、そして性の醒めんとする頃の奮闘に其夏は美事な勝利者、克己者であつた。

やがて九月が來た。

或る日に横濱にヴォーリズさんを迎へに行つた。

汽船から岸壁に降りたヴォーリズさんは、見違る程の健康體でニコ〳〵して握手した。

『ベビーさん』はIの事でIはヴォーリズさんの八幡に於る家族生活の最年少者なので、ベビーさんと綽名を貰つて居た。

『ベビーさん、あなたは私より背が高くなりましたね、嬉しい事です、私は私のボーイズが私より高くなる事を無上の喜びと思ひます』

一七

『IさんYMCAの會館を建てる土地は見つかりましたかね、今度シカゴの友人から五百弗と他の友人達から千弗程貰ふ事になりましたし、私の今迄の貯金、今からの貯金が千五六百圓はありますから合計して會館を建てましよう、

圖面は私が作りました』

Iはヴォーリズさんが圖面の引ける事を其れ迄、少しも知らないし、又建築の設計等が、其頭の中にある等を夢にも知らなかつた。

八幡キリスト教會のNさんとSさんは執事をして居る兄弟の牛乳屋さんで、兄のNさんはデップリした豪傑風の男、弟のSさんは瘠せた善人型の人であつた、兄弟は織田信長や明智光秀、森蘭丸等で有名な安土城跡に程近い村の水飲百姓の兄弟であつたが、徒手空拳で明治廿年頃より牛乳商を始めて、八幡町と京都市外の花園村で大きい牧場を經營して居た、兄のNさんは明治二十年頃にキリスト信者となつて、教會の會計を長く勤めて居た人で、常に會堂を建てよう、會堂が町の中央になければならんと言つて居た。

『諸君、私はキリスト信者の生活は昔の戰爭の樣に、堂々と旗を立てゝや

るに限ると思ひます、十字架の旗はつまり錦の御旗です、押し立たら、死んでも巻いてはならんのです。私は十字の旗を巻いて逃げた信者の末路を澤山知つて居ります、何が悲慘だと言つても、信仰生活の敗北者程、哀れなものはありません』

Nさんは、祈り會に必ず旗を巻くなと言ふ。

『神様、私は眞の罪人です、今日もつまらぬ事に腹を立てました、赦して被下い、ア、私は惡魔の様です、主イエス様、私を憐んで、私と私の周圍を、潔めて被下い、アーメン、アーメン、アーメン』

と眞劍に泣いて、慄へて祈るのは弟のSさんであつた。

IはNさんに、ヴオーリズさんの青年會館建築の計畫を、敎會の集會後に話すと、Nさんは嬉しさうに口を開いた。

『私は今迄、誰にも話しませんでしたが實は八幡町の中央に二百三十坪の土地を敎會堂の爲めに買つて置ました、今の御話は實に私の夢の實現です、よろしい、よろしい、あの土地を使つて被下い、私も其地の西の角に來年は敎會の方々と協同して會堂を建てましよう、ヴオーリズさんは東の半分に青年會館を建て〻被下い』

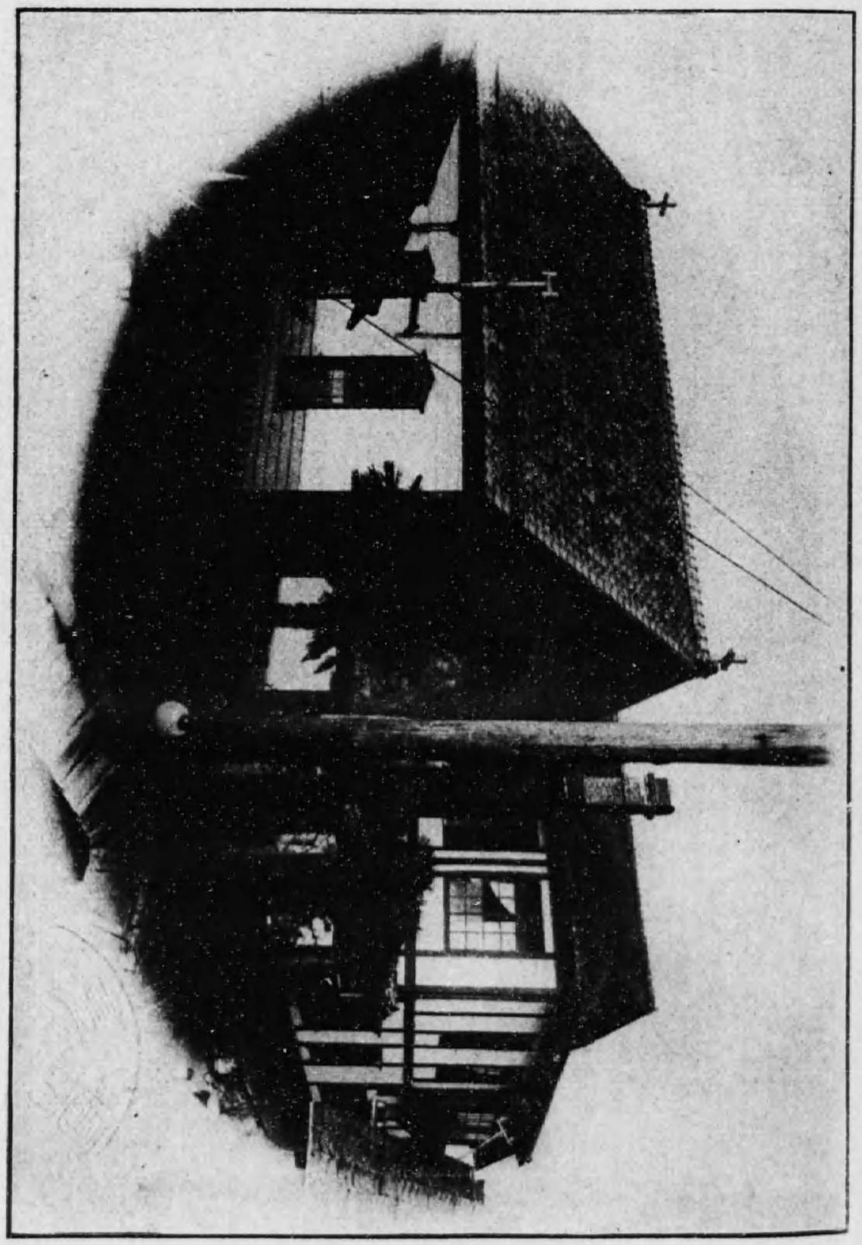
Nさんは本當に嬉しさうに、さう言つてそして永年の夢が、現實になつて來ると感謝して其場で神に祈を捧げた。

それで愈よ、ヴオーリズさんはYMCA會館を建てる事になつた。

一八

京都から請負師を頼んで來て、ヴォーリズさんの設計した、青年會館は工費參千六百圓で四十幾坪の二階建が出來る事になつた、それは明治三十九年の十一月から起工して、翌四十年の二月初旬に落成した。

ヴォーリズさんは大きい希望に輝きつゝ日本に再び歸つて來たが、福音宣傳の事はそろ〳〵周圍の形勢が變化した爲め、青年會館の建築が出來るに從つて逆比例に、だん〳〵六ケ敷く、氣勢が昂らなくなつて來た。商業學校の內には、東本願寺の後援をする佛教青年會が盛んになつた。時の校長I氏が其愛子を失はれてから非常に熱心な他力本願の信者となられた事も、キリスト教青年會不振の原因の一つになつた。バイブル・クラスも以前程盛んでなくな



たつなに判評不ぐすさろす成落
館會年青教トスリキ町幡八
會教トスリキ合組幡八

つた。Iは其級の只一人のクリスチャンで其頃熱心に讀書をするために、クラスの中に親しくして居た人達にも無愛想になつたのか、誰れもIの宗敎を構ふものがなくなつた、そしてチク〳〵淋しくなりつゝ明治四十年を迎へた。

二月十日に新青年會館で、献堂式を擧行した、珍し物好きの人々で、會館は滿堂の聽衆に滿され、都會から知名の人達が列席されて、兎に角盛會であつた、が、學生キリスト敎青年會は瀕死の重態で、バイブル「クラスも人影薄く、ボリ公（ヴオーリズさんの事）は國賊の養成をして居る、米探だなどと叫ぶものも出來て來た。

二月の中旬寒いある日に、ヴオーリズさんは自分の貯金全部を引出して京都の諸負師に、青年會館建築費を支拂ふて了つた、そして、今から後は大に生活程度を下げて、儉約して暮して行く事にして自分の俸給から、會館の維持

費を出し、家具やら窓掛やら、敷物を買ふ事に決心した、そして、臺所方面も、思切つて金を締めたものだから、會館が出來て、今迄の暗い借り家から、新築に移轉する事になつた時、コックをして居た男が、暇を呉れと言ひ出して、とう〳〵無理やりに出て行つて了つた。

二月の下旬に、IとヴォーリズさんのIとは手傳を雇つて來て、少ない荷物を、新築に運んだが、移つて見るとガランとして雑作は丸でない、敷物も、窓掛も、家具もない、たゞ廣々した、村役場の様な感じのする、青年會館に人の香は、唯二つで、淋しいものであつた、電燈は勿論まだ八幡町には珍しい位で、移つた當時は小さい豆ランプや、五分燈心の光がボンヤリ灯つて居た様な始末であつた。

石油ストーブを買つて來て、ヴォーリズさんとIとは自炊をした、そして其

時よりヴォーリスさんとIとは共同生活に入つた。

愈〳〵、四十年の三月が來た、そしてIは學校を卒業する事になつた、會館が建てば大に學生達の爲めに活動が出來ると、夢みた夢が全く裏切られた、そして献堂式の後の淋しさは、門前雀の巣や、蜘蛛の網が張る支那流の形容詞でもよく顯はす事の出來ない感じを日々に味ひながら、淋しく二人で暮して居た。

そして二人して、淋しい事を神に訴へたりした。

卒業式が三月廿五日にあつて、Iは其證書を受取つた、Iの母からは、高等商業へ行くか、又は或る人の世話で、デンマークのコーペンバーゲン商科大學に入學する様との二つの道が提出された、それでIは卒業式の終に、自分の荷物を纒める心積りをして、會館に歸つて來た。

ヴォーリズさんが二階の書齋兼應接室にボンヤリして居たが、Iの姿を見る

と一寸と言ふて、Ｉを室の中に呼び込んだ、Ｉは少し變だと思ながら、すゝめられる椅子に腰掛ると、ヴォーリズさんは蒼白く光る顔に強い確信のある眼を以てＩを見た。

『Ｉさん、私は今神様に祈つて居ました、私は今度、大決心をしました、あなたは私と一しよに祈つて下さい』と話した。

Ｉは不意打を喰つた様だつたが、

『なんですか、どうしたんですか、悉しく話して下さいな』と言ふた。

『それでは之を見て下さい』と、ヴォーリズさんがＩに見せたのは次な様な學校長より外國雇教師、ウキリアム・メレル・ヴォーリズに宛た、解雇狀であつたのだ。

證明書

ウキリアム・メレル・ヴォーリズ氏は西暦一千九百〇五年二月より滋賀縣立商業學校に於て英語科の教員であつた、其教授振りと、學生の陶冶に關する事は全然、滿足さるべきものであつた。同氏が解職されたのは、縣民の反對意志により、即ち、聖書を教へて、學生達をキリスト教に到る樣に感化したる事を以て、縣民の大部分なる佛教徒諸君の反對意志により解職したのであります。

學校長　Ｉ氏　自署

Ｉは驚いた、其以前から薄々は、ヴォーリズさんに對する雲行の惡い事を知つて居た、縣廳に勤めて居た教育課の或る人が、ヴォーリズさんに借金を申込

んで受附られないと言ふので、腹黒い事を考へて居る事もIは知つて居た、又三十九年の一二三月に亘る、近江新報其他の記事や論説に、ヴオーリズさんは商業學校を更へて宗教學校たらしむるのだと、書いてあつた事も思出さるゝ事である、

『私は、もう學校の教師でありません、今日あなたと一しよに學校を卒業したのです、私は今、神様に祈りを以て其大御心を伺つて居たのです。私は八幡町を去れば、京都の同志社や東京のYMCAは私を喜んで迎へて呉れます。然し、私は、日本の琵琶湖畔に、神の國の福音宣傳の爲め、命を捨てたいです。勿論、八幡町では私に壹錢の收入を與へて呉れる途はありません。然し、私は敢て、信仰の冒險をやります、そして、神にのみ頼つて、生きて行きます。其大決心を今、たゞの今、心の中に誓つたばかりです、「神の國と其

義を求めよ、總て是等のもの、(衣食住のもの皆)は爾等に加へらるべし」と聖書にあります。私はそれを確信して、己を棄てます、そして我一身を湖畔の土に埋めましよう』

Iは涙の頰に傳はるのを覺えた、そしてメレルさんの腕を抱いて、二人して長い間祈つた、

突然、ヴオーリズさんは身を起した。

『Iさん、學生の食料一ケ月は寄宿舍で何程ですか』

Iは驚いて返事した。

『四圓五拾錢です』

『米と鹽ばかりで、一ケ月一人の食料は何程ですか』

『飯と漬物でしたら、まあ參圓五拾錢位でせう』

ヴォーリヴさんは再び跪いた、そして

『天の父様、私に毎月參圓五拾錢づゝ與へて下さい、私は、あなたがそれだけを保證して被下れば、私の一身を、此青年會館に埋めます、そして琵琶湖畔の福音宣傳に一生を捧げます。アーメン』

Iは、轟く胸と、瀧の樣に流るゝ涙を留めもあへず、決心する事があつた。

Iは今迄クリスチヤンの一人の積だつたが、眞の傳道心は無にも等しかつた、今目のあたり、眞の基督魂を見た、十字架を負ふ一人を目擊した、今や、ためらふ時ではない、血の最後の一滴迄も福音宣傳の爲めに、利他主義の實行の爲めに、遠く北米より來つた此一人のヴォーリズさんの同僚として、捧げたいと感激した。

『ヴォーリズさん、私は、私の將來を捨てます、私は母から送つて來

る、今迄の學資を其まゝ送つて貰ひまして、兎に角あなたと二人の食料だけを出します』と其の聲は震へて居た。

ヴォーリズさんの目に熱い涙が漲つた、そして、二人は、再び手に手を取つて跪いた、そして、

無言の感謝と、感激の祈りとを神に捧げた。

一九

『眞理は永久に斷頭臺に据られ、

醜惡は永久に王座を占む、

されど斷頭臺は未來を搖り動かすなり。
未知の闇には、暗きあたりに神立ち給ひ、神の者等を守り給はん（ローウエル）」

さても永く振り翳された刄は遂に落ちて來た、然し私の事業は、收入が絶えたのみでは終りとならない。我の心は壞かれない、其理由は「神を愛する者には總ての事働きて益をなす」と聖書にある、「正義は正義だ、故に神は神である、正義は勝利者である、疑ひは神に對する不忠だし、氣遲れするのは、罪ではないか」と誰れかも言ふた。

神は私に此問題を解決する光榮を擔はせ給ふたのだ、私は驚くべき機會を目のあたりに見る、私の存在する事、生活する事に、少しでも意義があるならば、今やそれを發見する時が來た、私は希望を以て出發するのだ　そして見えざる神に頼るのだ、失敗すれば私は倒れて止む、しかし世の人は私が背後に瘡を受けて逃げ死したのでない事だけは、疑ふ者があるまい、私が若し成功すれば、近江の國は愛の福音を聞くのだ』

ヴォーリズさんは、こんな悲壯な文章を書いた、そして明治四十年の四月から、『近江の芥種』と命名した、英文月刊雜誌を手紙に更へて米國其他の友人に送る事になつた。

Iはヴォーリズさんと共同生活をする事に定まつたので、纒めた行李を解いて、相變らず學生時代と同じ樣に、淋しい青年會館に住んだ、そして四月を迎へた。

四月には東京で萬國基督教學生大會があつて、ヴォーリズさんとIとは本部より招待されて出席した、二人は三等車内の一隅に、小さくなつて上京し

た、途中、夜中の十二時頃より、車中の込み合つて來るので相ならんで坐る事にした、そして一時間交代に、お互の膝枕を供給し、一人は一人の安眠を守る約束をして、寢たり起きたりして居ると、向ひ座席の一人が、

『一體この異人さんは、あなたの何に當る人なのです』

と處構はず大聲に聞いたので、Iは往生して一言もなかつた。

神田の青年會館に開かれた、萬國基督教學生大會では、ヴォーリズさんはオルガンを彈き、Iは地下室で日本に關する書籍を賣つた。

大會がすんで歸つて來ると、一通の手紙が二人を待つて居た、ヴォーリズさんが開封すると、中から金五拾圓の爲替劵が出て來た、そして手紙の文には、

『此爲替劵は、無名の友人よりヴォーリズ氏の生活費へ、今後毎月送らるゝものです、クリストの福音の爲め大に自重して下さい』としてあつて、手紙を

出した人は京都クリスト教青年會主事フェルプスとしてあつた。

二人は、涙を以て神に感謝した、そしてIの學費の毎月拾七圓に加ふる金五拾圓を以て生活する事になつた。

さうして居ると、各地の學校より、ヴォーリズ氏を英語教師に招聘して來た、京都の同志社は勿論、高等學校邊より、八幡商業學校以上の給料を以て迎へに來た。然しヴォーリズさんは、Iと二人で毎月六拾七圓の生活を棄てなかつた。

其生活の狀態は、全く、昔の物語りにある籠城のそれであつた、外出すれば、『免職の異人』と、のゝしる聲が聞へる、そして後任に來た外國人雇教師は、水夫上りの酒のみで、太いステッキに犬をつれたりして町を散歩する、時には怪しい日本の洋妾も町に來ると言ふ有樣だ。

伽藍とした青年會館に、ヴォーリズさんとIは、謄寫版を使つて、卒業した信仰の友へ、毎月日英兩文の『月報』を印刷して、送る事と、朝から夕迄、讀書したり水彩畫を畫いたり、石油ストーブをつゝいて自炊したりした。

時には、お菜に困つて。學校の寄宿舍から、提げ函に入れた、薄ぎたない小僧の持つて來る、豆腐に油揚げや、小鮎の飴だきや、サイラの乾物を、二人して食つた、Iはヴォーリズさんが、そんなものを箸で、口に運ぶのを見て、涙を落した事が度々あつた。

五月に入つてから、五人の學生が來て青年會館に下宿住居する事になつた。

ヴォーリズさんの國の人達が同情して送金して呉れる金が、毎月少しづゝ來るので、夏前から掃除夫兼料理人を雇ふ事になつた。

そして、サラダ油の代りに、滋養分に富むからと言ふので、バナゝと林檎と

蜜柑のフルート・サラドに、鱈の肝油をかけて出されたり、生卵子は毒だからと思つたのか、アイスクリームを作らせると、焦げ臭くて仕方のないもの等を食はされて居た。

Iは或る日、外國の雜誌で、蛙の足のフライが甘いと言ふ事を讀んだから、早速實驗する事に相談が纏つた、それで百姓の子供に一籠拾錢で三籠の蛙を捕らしにやつて、持つて來たものを、皆足をはずして、新米の料理人に油揚げにさせた。そして舌鼓を打つた。が其翌日、

『Iさん、大變です、一寸來て下さい』

とコックの呼ぶ聲に階段を下りて行くと、眞赤な顏に嶮しい人相をした、八幡町雇の掃除人夫が呶鳴つて居た。

『なんぼ、ちりとりの俺でも、蛙の腹ばかりの、ごもくは、取らんぞ、オイ、

コラ、コックたら、クックたらぬかす、板塀！何とか返事せい』

Iは頼んで、貳拾錢の銀貨で蛙の死骸を片附けて貰つた。

ヴォーリズさんはもう八幡で何もする事が出來なくなつた、それで毎日墨書の研究と、詩作と、製圖の練習に耽るの外、求めらるゝまゝに、意根、長濱、氷口等の教會の應援をしたりして、明治四十年は、何の爲す處もなくて終つて了つた。

Iは相變らず、英語の勉强したり、通譯をしたり、製圖の稽古を手傳つたりした。

二〇

『北海道の冬は、寒いぞ、君！　俺がな兄貴の店に居た時、雪の降る夜だ、店から二三町向ふの居酒屋で、コップ酒をシコタマあふつて、千鳥足で路を歩いてる間に醉つ倒れて了つたらしいんだ、眼がさめて起きようとすると、着物が大地に氷で綴ぢ付けられて居て、身動きが出來ない、仕方がないから「助けて呉れーい」と、どなつたのさ、それでも誰れも夜更けに來て呉れないから、とうとう「火事だ火事だ」とウンと吠えた。そしてすぐ前の家の男を起して、沸え立つお湯を鐵瓶の口から、俺の着物の周圍にかけて貰ふて、ヤット自由な身になつて店に歸つた時は、二時過だつたよ、それから俺は肋膜炎をやつたのだ』

Kは自慢さうに同級生の年少者を集めて話して居た、Kは蒼白い顏のデブ青

年で象、象と綽名されて居た、顔の面積の割合に二つの目が少さくて、身體が小山の樣だつた、腕力も相當あつて、よく一升徳利を振廻したり、人の頬をイヤと言ふ程なぐつたりした。

此Kは頭がよくて、特に英語が得意だつた、そしてヴォーリズさんの借り家に、早くから其家族の一人となつて居たし又、明治三十九年の九月にはバプテスマを受けて、キリスト信者になつて居た、Kは實に麗しい信者として暫くは學生間の模範の樣であつたが永く續かなかつた、そして學校も卒業せずに、彼はまた家兄の店のある、北海道に行つて了つた。何んでもまた例の酒癖が出て、手のつけ樣がないと言ふ噂が聞こえて居た、

Iは明治四十年の暮にヴォーリズさんと相談して、暫く神戸の家に歸り、商業の實務に當つて、經驗を得て後、再び事を共にすると言ふ話が纏まつて、

四十一年の一月一日より八幡を去つた、そして、自宅の商業に身を入れたり、後三井物產會社の社員になつたりした、そして其の時分に、神戸の諸敎會で說敎を頼まれたり、青年會の英語敎師を勤めたりして四十二年の暮迄、ヴォーリズさんとは二ヶ月に一回位神戸より八幡に通ふ位の連絡を取つて過して了つた、Iが去つて後に例の酒のみのKが瓢然としてヴォーリズさんに歸つて來て、四十一年頃より通譯になつたり、事務員になつたりして居た、處が今一人のKがある。

此Kは、八幡の遊廓で育つた亂暴青年だ、養父に當る人が劍客で親分肌の男であつた、Kの少年時代は、擊劍の稽古に熱心で、十二三歳で、も早一かどの酒豪であつたさうだ。IがKを知つたのは、商業學校に入學した早々であつた、學校の廊下に立つて友達と話しをして居ると、向ふの二年級の敎室の前か

ら、ノツ〳〵と逆立ちをして、兩手の足取りも輕々と、股を空中にひろげ、兩脚をクネ〳〵と搖りながら、長い〳〵廊下を練つて來るものがあつた、それが身體の小さい、然し、渾身是筋肉也とでも評すべきKであつた、Kはよく喧嘩をして居た、又或る體操の時間に十五六尺もあるブランコの釣り臺の上から、Kが、一人思切つて下の砂の上に飛下りたのを見た、其時のKは兩脚と腰の連絡がギクリと音を立てゝ、ゴム人形の樣に縮んだのでないかと、Iは驚ろいて上級生K君を見た事もあつた、兎に角IにはKは無鐵砲のそして無邪氣な負けず嫌ひな青年であると思つて居た、或る水曜日、(それは明治三十八年の秋の終り頃である)バイブル・クラスに珍客があつた、それはK君だ、酒を召し上つたか、顏を眞赤にして臭い鼻息を手で押隱して、入り口に立つた居たのを

『K君、ヤア、來給へ、こつちへ這入り給へ』で以て、誰れかゞ引張り込ん

だ、處で、ヴオーリズさんが例の赤シャツを着たまゝニコ〳〵して、Kをクラスの人達の中を氣を利かして、わざと後ろの暗い席を與へたのであつた。

其Kが痛快な男らしい青年であつて思切りよく、煙草を棄てる、酒を止める、キリスト信者になる、とう〳〵遊廓に其家のあるのは不愉快だと言ひ出して、三十九年に卒業して暫くヴオーリズ氏と同居した。そして其書記をやつて居たが、同じ年の夏前ヴオーリズ氏と衝突して『出ていつてやるぞ』と一言を殘して大阪に行つて了つた、そして綿問屋やら雜貨店やら、或は大阪府警察部やらに雇はれて、痛快な齒ぎれのよい奉公をやつて居たが、其年の暮から一年志願兵で大津の聯隊に入營して居た。

ヴオーリズさんは此陸軍歩兵少尉になつたKを、再び招いて以前の酒呑のKと二人を手傳はして、明治四十一年の暮頃よりソロ〳〵建築の設計監督を京都

の三條キリスト教青年會館の一室で開業したのであつた、それ迄は、或は同志社に英語を教へたり、又京都の青年會の囑託教師をしたり、又個人教授をしたりして、隨分英語の切り賣をしながら、それでも八幡を本據として京都に通ふて生計の道に苦心して居たのだ、明治四十二年には京都の三條柳馬場に、獨逸人デルランの設計になつたキリスト教青年會館が、米國のワナメーカー氏の寄贈として京都市を飾る事になり、其建築が始まつたので、其監督として我ヴォーリズさんが雇われたのだ、毎日、セメントの粉末や、壁土や木屑や煉瓦の破片の飛散る中に、日本の職人土方を相手にして、優しい若いアメリカの青年振を發揮して居た、お晝飯は親子ドンブリ一杯で元氣をつけて動いて居た。そして其收入が幾分か確定すると、直ちに使ひ途を考へて、明治四十二年には、東海道鐵道の要點、馬場（大津）と、米原に、小さい借家を見つけて、

二人の青年幹事を雇入れ、鐵道從業員の爲めに、慰安、並に教育の事業を始めたのである。

此時分のヴォーリズさんの無雜作な生活振りは、實に昔の物語りにある、フランシス・ザビエー師の樣であつた、錢湯に平氣で出かけて、番臺の女の目を驚かしたり、薄汚いのんだくれのKの、寐床にもぐり込んで寐る位は朝飯前のことだし、洋服なんかも一向お構なく、所謂、なりも振りも忘れて、其青春の時代をたゞ一すぢに、建築の設計監督を職業として、成功せねば止まぬ、強い〳〵鐵の意志が動いて居た、思へば一心不亂の權化の如く、たゞ神の國の擴張を夢みて、難境に處したヴォーリズさんは實に神々しいと言ふより外はない。

それに、のんだくれのKは、ヴォーリズさんの小金を横領したり、他のK君の止めるを聞かないで、京都の遊廓なんかにずぼり込む事になり、一方ヴォー

リズ氏が涙を流して祈つて居るのを、浮の空に聞き流し、醉ひつぶれては、人通の多い三條の大橋で、欄干越しに立小便をして見たり、無錢遊興で警察の厄介になり、譯の解らぬ無茶英語で巡査達をてこずらしたりした、何んでもKは警察に行くと一切日本語を使用しないさうだ、ヴォーリズさん直傳の英語を、のべつ幕なしにどなり倒して、例の象の様な巨大な體格を資本に、暴れ廻るので隨分厄介千萬であつたと言ふ、後暫くしてKは、ヴォーリズ氏方に居たゝまらず出奔して、或る船會社の船員になつて了つた。或時の如きは日本刀を引拔いてヴォーリズさんを強迫したりした事もあるが、よく、涙と共に悔悟する男であつた。惡く言へば眞に悔悛の芝居の妙手だつた。

それで、ヴォーリズさんの建築事業は、始に齒切れのよい眞直なK君と二人でやつて居たが、明治四十二年の冬からIが神戸を引揚げて、その事業に參加

する事になつたのである、

『我等は二十年の將來を見るのだ』とは、其の頃のヴォーリズさんの標語だつた。

二

明治四十二年の暮頃そろ〳〵建築設計の事業が世に認められかけて、收入も月々の生活費以上になつて來た、ヴォーリズさんらしい事であるが、直ちに宣教師を雇ふて自分が直接湖畔の村々に傳道する暇がないから、同志を賴む事にした。そして日本に英語教師として來て居た米人ラブさんを、教師の月給より

五割安で八幡に迎へた、ラブさんはアメリカの人に珍しい瞑想家だつた、聖書を膝の上に置て目を閉ぢて、三四時間身動きもしない行を毎朝やつて居た。

四十三年の一月にヴォーリズさんは西比利亞を通つて、歐洲經由で米國に歸つた、それは同志を探して近江八幡に迎へる爲めであつた。

英國につくと、以前建築設計をした東京の支那人基督教青年會館の寄附者達に會ふて、其中華民國青年會のために提灯持をした處が、『あなたは何の爲めに日本に行つたんですか、それを聞きたい』と言ふ事になつた、不圖も湖畔の基督教宣傳計畫に就て、卒置にヴォーリズさんの經驗法を話したさうだ、すると其中の一人が感激して參拾圓程即座に寄附すると言ひだしたが、ヴォーリズさんは受取らなかつた、そして其まゝアメリカに渡つて了つた、金は貰はなかつたが眞の同情者を、英國の中心地に得た。

茲に挿話が入る事になる。

數十年前英國リーズの町に、珍しい一人の獨身の老爺が居た、ラバート・アーシントンと言ふ男である、年少時代から一貫した經濟家で、少しの親讓りの財產から六百萬圓位も資產を有する人と評される程、富んで居た、處が嫁を貰はない、一生獨身で『アイツは、嫁貰ふたら財產が減ると思つてるんだらう』等と誰が言ひ出したのか、ラバートは『しわん棒の柿の種族』に類する男とせられて居た、默々としてよく各種の事業に奮鬪した、そして儲けた金は殆ど地獄の釜に入れたものゝ樣に、決して再びラバートの金庫から社會奉仕の寄附、宗教團體の寄附として世に出なかつた、當時の人々は隨分ラバートを輕蔑したのだ、處が或る日ラバートは朝起きて來なかつた、雇婆さんが寢室に入つて見ると變だつた、彼は冷い骸をベットの中に横たへて居た。六十を超へた老人は淋

しく一人で天國へ移つたのだ、大騒ぎになつて、醫者が來る、友人が來る、そして葬ひの準備をして居ると、金庫の中から一通の遺書が出た、要領はかうだ。

『私の遺産全部を擧げて、以下指名する數人の友人達に托します、私の富を全部基金として世界の敎育とキリスト敎宣傳の爲めに、賢こく、適宜に使用して下さい』と

此遺書が世に發表された時、鈍重なビーフ、イーターの居る、英國の空氣も清涼感激に滿ちたさうだ。

ヴォーリズさんが會ふた英國の紳士は其の基金を管理して居る委員の一人だつた。

四十三年の年末に、ヴォーリズさんは又チエービンと言ふ、コルネル大學出の工學士を連れて、横濱港についた、Iは迎へに行つて三人して、東京の日本

宿に泊り込んだ、それから程なく湖畔の八幡町に歸つて來た。

Iは八幡の青年會に一人で四十三年中留守して居た、英文の雜誌も一人で編輯し、記者も小使も何もかもやつた、ヴォーリズさんが遺して行つた金も切れたので、母に無心を言ふて毎月百圓づゝ程出して貰つた、其年末、二人のアメリカ人とIとはヴォーリズ合名會社を組織して登記を濟ませた、資本金は現金九百圓と勞力出資が二千七百圓だつた、小さい會社だ、しかしそれが全部の所有金だつたのだからさうした。

英國からヴォーリズさんに手紙が來た、そしてラバート、アーシントン基金より湖畔の傳道事業の爲め鐵道青年會館建築の目的で英貨六百磅（六千圓程）封入してあつた。

さあ大喜びだ、兼て經營して居る馬場鐵道青年會に此金を使用して鐵道從業

員に慰安を與へ、智育、德育、體育の三方面、敎會の歩む途より變つた途を行く、新らしいキリスト敎の運動をやる事にして、早速土地を八百坪買入れて、建築する事になつた。

一方今迄の樣にヴォーリズさん個人の努力による、湖畔のキリスト敎事業は、形を取る必要が出來て來た、それで建築師ヴォーリズ合名會社が近江のヤソの本山だとの事になつたが、私共に茲に新たに團體を組織する必要を感じた。

その内にKさんも暫く建築の實地研究に京都と伊勢方面に行つてたが、歸つて來た。

そこで、近江ミッションと言ふ名を取つて、生れて來たのが、後近江基督敎傳道團となつたのである。

其綱領に曰く

一、近江の國にて敎派に關係なくキリストの福音を說く。
二、敎會は設立しない、傳道だけする。
三、日本人も外國人も風俗習慣の別、國家の別、人種の別などを區別せずに共同生活をやる。そして完全に一致する團結を實現する。
四、他の福音宣傳事業をやつて居る處に行かぬ。
五、農村、漁村の傳道をやる。
六、指導者の養成。
七、酒と煙草は害惡と認める、結婚の向上、體育と衛生の進歩を計る、貧乏問題の解決をする。
八、キリスト敎の宣傳については前人未到の地に行く。

と言ふ樣なものを作つた。

そして、精神的の運動指導者として、牧師武田猪平氏を京都同志社總寮長、宗教主任の地位より近江に迎へて、彦根教會と協同して、同氏を彦根に駐在して貰つて、八幡と應呼して湖畔の事に當る事となつた、それが明治四十四年の六月である。同年の十月二十四日に馬場鐵道キリスト教青年會館の献堂式があつた、三層の建坪五十坪に近い家が出來た、工費は地所を入れて八千圓强、それに家具や設備の爲めに少からず金が要つた、いや、ヴォーリズ一流に豫算以上も入れ上げたのだ、Iは會計も自分の責任であつた、そして献堂式の日に會計帳を出して、銀行の預金帳を出した、其現金が零に近いのと、献堂式に百餘圓の經費の出處が何處にあるだらうかと、考へた時、泣いて了つた。

涙がぽろ〳〵落ちた、階下では祝賀會だとて大津市の有志の人達が茶卓を圍んで式後の閑談をやつて居る、新會館の幹事や牧師さん達も愉快さうにして

居る、Iは苦しかつた、そして、其時

『神樣、私は信仰の冒險をします、お金を下さい、必ず有益に使ひますから』と祈つて居た、Iが居ないとの事で探して居たヴォーリズさんが、三階の寄宿舍の部屋の片隅に充血した眼を拭つて居るIを見付けた。

『ホワッ、ジ、マター』『何うした』と言ふて呉れたので、Iは飛付いた、そして兩人して、神樣に將來を托して、信じて祈つた。そして手も堅く握り合ふて居た、日本の涙もアメリカの涙も同じ色の鹽水となつて疊の上を流れた。

二二

明治四十四年の夏に、建築設計の事務所を新築落成した、そして其事務所の裏に八疊の座敷と三疊の臺所と、一寸した植込のある庭が出來た。

Iは其母を神戸から迎へて暫くその座敷に住んで貰ふことにした、お母さんは女中を一人つれて、五六ヶ月保養の積りで近江八幡に來た、そして床の傍の押入の中に佛壇を作つた。それから毎朝毎晩Iの父の冥福の爲め、Iの死んだ妹の追善のため。稱名、念佛の聲、鐘の音をヴォーリズ合名會社の事務所から聽かれることになつた、建築設計部は朝八時に仕事にかゝるのであるが、其仕事の前に製圖室に一同參列して、朝の祈禱會をする習慣になつて居る。が、それ以前Iの母の念佛は朝七時にはきつと實行されてたので『佛敎は早起きで

ヤワは朝寢だ』と言ふて外を通る人もあつた、Iの母は後『傳道團の母』と言ふ稱號をヴォーリズさんが與へた程の、クリスチャンになつたのであるから、少しIの母の話を書かして貰ふ。

* * * * *

まだIの母が三十歳にならない前に、或る日父が大酒を飲んで、何の爲めにしたのか、持つて居た盃を火鉢のふちで打こはし、其破片で母の左の頬を切つたのだ、Iは驚いて見て居た、眞紅の血はふき出した、そして頬より流れて咽喉迄も血に染んだ、父は沸然として其まゝ家を出て二三日歸らなかつた、母は近所の醫者へ、ハンカチで痕を押へながら出て行つた。十歳に足らぬIは、心臟の鼓動も止る程泣いた、あとで聞くと、母は、

『先生、私の頬のきずは、なるべく大きく跡がつく樣に治して被下い』と

言ふたさうだ、これが悲劇でなくてなんであらう。それから母の頬にはむごたらしい切痕が數年の間とれずに光つて居た、父の狂暴に對する貞節な母のプロテストだつたのだ。

Iの父は若い時より、酒魔の捕虜だつた。頭は人よりも明敏で、二挺の算盤を使つて帳簿の締上げをして人を驚かしたとか、よく商機を逸せずに、生馬の目をぬく程のことを、やつてのけたと評されて居る人だつたが、酒と女には狂ふたらしい、機嫌のよい時は實に温順な、大まかな人でありながら、アルコールが入ると突飛な事をして出刀庖丁を持出したり、火鉢をひつくり返したり、五圓札を引さいて火にくべたり、又其實子であつても、沸騰したお湯の入つて居る鐵瓶をなげつける程の事をした人だつた。

父は三十五歳を限りとして、現世を離れていつた、Iは父の事を思ふとたま

らなく哀しい、それには色々の家庭の事情やらがあつた事だらうが、Iにはそれを聞く勇氣がない、葬つたものを掘り出す必要もあるまい、然したゞ一つ父の心に無限の同情と涙を捧げるものがある、それは丁度父の死の前數日前の事であつた。朝起きる時より父はイソ〳〵して居た、瘠せた脊の高い父は、靜かに靜に起き上つて近所の散髪屋に行つた、Iは學校に行つて歸ると、父は寢て居た、その夜然、

『I、一寸此處へお出で、お松ちやんもお出で』とやさしく、父がよんだ、母は次の間に居た樣だつた、父はソロット起き直り、寢床の上に坐つた。見ると父の美しい毛髪はなくなつて、青坊主に剃つてあつた、そして其顏は涙でぬれて居た、二人の子供は坐つて居ると、父は形態を改めて手をついて、其坊主頭を疊にすりつける樣にして言ふた。

『二人とも今日はよく聞いてお呉れ、お父さんは今迄惡かつた、年は行かないでも二人はお父さんの惡かつた事が、よくわかるだらう。何んにも言はずこの通り、あやまるから、宥してお呉れよッ、病氣が治つたら生れ變るから。』と言ふて、大粒の涙で疊をぬらした。それが丁度水をこぼした樣になつて居た、Iと其妹の松子は、ぼんやりする程驚いたが大聲を擧げて泣いた、勿論父を赦す氣になつて居た、過去の狂暴の父はそこに跡も止めず消へ失せて居たのだ、次の間の母もそれを聞いてたのだらう、其日から二三日はI等の家庭は天國だつた。しかし悔改した父は壽命がなかつた、そしてすぐ三日の後に死んで葬られる人となつた。Iの母は妹をつれて、さゝやかな、兵庫皿池の片ほとり、父の弟の經營する油工場の、監督の住む住家に移つて行つた、Iは小學校の都合で伯父の家に住んだ、それからIは近江八幡の商業學校に入學す

る事になつたのだ、明治三十六年の古い話しになつたが、

その母は、Iが學校を卒業して、ヴオーリズさんと一しよに暮す事になつたとき親類の内の識者とせられてる人から、

『Iはヤツの異人に、だまされてるのだから、早く上の學校に入れるか又はつれて歸るとよい』とか、

『Iにそんなに毎月百圓以上も送金する必要はあるまい、異人の食い物になつてるのだらう』とか、

『今にIもそんなにして捨て置くと、親に似た子になつて暴れ出すかも知れん』とか言はれるのを、一切聞かずにIを絶對に信じて居たのだつた、Iは父の死の時の印象が強く響いて居て一滴の酒も飲まずに、煙草も勿論くすべずに成長して來た、親譲りの強い性に對する誘惑にも、クリスチャンの身だしなみ

を實行して、外に出た惡事はしなくて大きくなつて來たのだ。そのIの伯父の家に、ヴォーリズさんは何度も泊りがけに來られたり、或る時は三四日もゴロゴロして家族の一人の樣になつた事がある、其中の賄方と世話役はIの母だつた、Iの先生、1の友達としてのヴォーリズさんを母は本當に喜んだ。

『あなたも八幡にくるとよろしい、Iさんと私だけで淋しいです』とヴォーリズさんは母に話したりした。

『私はあなたの嫌なタバコがすきなんですし、私は佛さんに一心になつてますから八幡に行くとIが困りますでせう』なんか言ふてニコ〳〵してヴォーリスさんを迎へて居た。

母の里は同じ神戸の榮町で、昔は船問屋をして居た、其父に當る人は本當のチョン髷で、維新のとき、兵庫が開港になり、居留地が生田の森の南海岸に出

來るとき、政府の役人から其持家を西洋人の住宅が出來る迄、異人さんに貸してやれと命ぜられた。『俺の家に、紅毛人が這入るのは情けない』と言ふて居たが、一軒の家をいや〳〵貸たのだつた。その後異人館が出來てメリケン人が出て行つた跡で、母のチョン髷の父は其貸した家を取こぼつて了つたさうだ、穢れた家は見るのも嫌だとあつて、そして其家の下になつた地面を掘つて捨て、清淨な砂を海岸から持つて來て其土地をうめ戻し、鹽をまいて、潔めたさうだ、

そんな舊家から嫁に來た母が、ヴォーリズさんが日本で作つた最初の女友達にならうとは、運命の戯れとでも言ひながら眞に人の想像以上になつて來る。

『お母さん　今度建築の事務所が出來て其裏に、あんたの爲めにヴォーリスさんやら仲間の者が、座敷を作つて下さつたから五六ヶ月でもよいから八幡に來て下さい、タバコと佛さんのことは一切私達は干渉しませんから』とIが

言ふと、丁度其少し前1の妹の松子が關節炎と結核の爲めに死んで了つたので、女中一人相手にして悲しく暮して居た母だから、『それでは』と言ふ事になり明治四十四年の夏前から八幡に來た。

ヴォーリスさんは、Iの母の事を『マザー、ヨシダ』と言ふて、實に大事にしてくれた、言葉も其時充分に通ぜなかつたが眞心程よく通ずるものはない、とうとう一年もたゝぬ間に、Iの母は佛壇を國に送つて了ひ、位牌は寺に納めて、四十五年の三月十五日、八幡の町は左義長祭りでのんだくれと、お化と、太鼓、拍子木の音と、紅提灯と花火と、馬鹿ばやしの中で　教會堂はあまりに騒々しいからとて、五年以前、ヴォーリズさんが、神に米と鹽とを下さいと祈つた、あの青年會館の二階の一室で武田牧師から洗禮を受けた。

『I、お前はイエス・キリストの敎をしつかり奥の院迄修養したら、キット

佛の敎に歸る』

『いやお母さん、あなたが、法然上人の敎へや釋尊の事が本當にわかれば、きつとキリストの信者になります』

と云ふ樣な會話をしてから七年目に『マザー・ヨシダ』は主の選び給ふものとなつた、それからよく敎會の爲め、傳道園のために働いてくれた。

それで、ヴォーリズさんと、Mと、チエービンさんと、Iの四人の青年の中に、一人の五十に近い母を加へて、湖畔の宗敎運動をする事になつた。

ついでに認めると、此母が大正六年五月二十一日に逝つた時、ヴォーリズさんは眞に涙を流して悲しんだ、そして、『近江ミッションの母』と題して追悼の文字を記して歐米の友人に送つた。それから其葬式は一切葬式人夫を拒絶してキリスト敎會の人達が、何もかも引受けて西山に送つた、Iは潑溂たる生氣に

近江ミツヨンの母吉田柳子

滿ちたクリスチャンの青年十六名の肩に、寢棺が載せられて町を行くとき涙と共に感激した。

『お母さん、私達はあなたを愛します』と聲を限りに叫びたかつた。

二三

明治の最後の年即ち四十五年の梅雨の頃だつた、三人の米國婦人客が、或る雨の降りしきる日、ヴォーリズさんを訪ねて青年會館に來た、Iは馴れない其時分雇つた、Uと言ふ放蕩百姓であつて救世軍の兵士になつた、赤シャツの男をコックに仕上げる爲めに骨を折つて居た、其男は、八幡神社の祭禮に今川

燒か何かの屋臺店を張つて居たのだ、梅毒か何かで片目を潰して居た、淺草の日陰に育つた女を細君にして居た、そして其女も救世軍のホーム出身と言ふので頼もしい事夥しい、何んでも其頃の教會の祈り會に、赤シャツの赫顔、鬚むしや男が、魂の底から出る樣な慄へた聲で熱烈に祈つたのが、教會の人の間に評判となつて居た。とう〳〵ヴォーリズさんとIとが相談して、雇つたのだ、(一體ヴォーリズさんは其家持を頼んだ男には運がよくなかつた。)

女客が三人と言ふし、それに案内者はフェルプス氏だとの事で急に、テーブルに四客分の皿と、ナイフと、フォークと、スプーンを用意せねばならなかつたが、そんな道具はある筈がない、それで、向ひの料理屋から借りる事にした、が、いよ〳〵借りて來ると驚くべし、食事道具はアルミ製で、曲り、ネジレ、撚れて居る上に所々疱瘡の跡の樣に黑い點や黄色い斑がある奴ばかりだ

つた。

朝十一時頃にいよ〳〵お客が來た、其日雨は大夕立の樣に降りしきり、到底戸外に出られさうではなかつた、八幡見物は斷念して、悟りのよいお客四人は、日本手拭のつぎ合せた、テーブル掛のある食卓を圍んで、半燒きの鷄と五日越しの食パンをかぢつた。

『ミスタ・ヴオーリズ、妾達に、日本の田舍の本當のキリスト敎の話をして下さい。何んでこんな淋しい、バラックにあなたは居るんです、將來は見込があるんですかね』

とミス・ツッカーが口を切つた。

ツッカー嬢は黑い喪服を着けた三十を越えた、アメリカ人としては色のくろい理智に輝く婦人だつた。

『私達は夢見てるんです、白晝の夢を、琵琶の湖はガリラヤの湖になるんです、伊吹はヘルモンの山に、そして、安土にはあのフランシス・ザヴイエー師の來た時の樣に。主イエスの學校が出來るんです、それから日本の同胞は、クリストをホザナよと叫んで、其主と仰ぐ時が來るんです、』Iは横合からこんな事を話した、ヴオーリズさんは、ニコ〳〵して、ナイフと、フオークを動かして居た。

雨は益〻降りしきる、安普請の青年會館は所々に雨もりが始まつて大騒ぎ、しかし、きたない庭には、水が流れて、平常よりは詩的に美しい環境を作つた。

お客達は午後四時頃、雨の中を、ボロ車に乘つて歸つてしまつた、ヴオーリズさんは